
the natural world

のら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

the natural world

【Nコード】

N2459T

【作者名】

のら

【あらすじ】

いつも見渡せば目に映っていた自然の姿。それがある日をきっかけに失われていった。

機械《machine》。

その装置は自然の力を吸収し、新たな力を生み出す役割を持っていた。

機械が各地に設置されると、世界の自然は瞬く間に失われていった。

荒野化する世界に、誰もが悲しみ、嘆き苦しんだ。

それから数年後、世界はほとんど自然を失った。

荒野に咲く花は無く、清らかな水が湧き上がることも無く。

潤いを保っていたのはほんの一部だった。

その一部に含まれた村に住む少女^{レム}

他者には見えない存在を見ることができ、人では無い者の声を聞くことができる。

そんな能力を持つ彼女の元に、一通の手紙が届いた。

そこには友人からの助けを求める声を書き記されていた。

レムの旅はここから始まる。

消えていく自然

それはあつという間の出来事だった。

誰が設置したのかも分からない巨大な装置。

それを人は機械《machine》と呼んだ。

黒と灰色に塗られた体の中に、無数のコードがくねくねと蛇のように絡み合い、窮屈そうに押し込まれていた。

機械は怪しく光る赤いランプを点滅させ、低い声ですつと唸り声をあげていた。

ブルブルと震え、今までに無い騒音を出し始めた機械に、誰もが止めさせようと停止するボタンを探した。

だがそのボタンは何処にも存在せず、誰も機械を止めることはできなかった。

機械はそんな人々を他所に、自分に与えられた役割を果たすため、世界の自然の力を吸い取り始めた。

機械の周囲に咲いていた花が瞬く間に枯れ、動物も異変に気づいてその場から逃げ出した。

機械はさらに勢いを増し、もっと遠くの場所にある自然にも手を伸ばした。

自然がどんどん吸い取られて行く中で、人々は機械を止める手段を考えていた。

物をぶつけて壊す、水をかけて壊す、コードを切つて壊す。

たくさんの案が飛び出ではそれを実行して、結果はすべて無駄と終わって。

手も足も出なくなつた人々は、目の前で自然が失われて行くのを、ただ見ているしかなかった。

同じような装置が各地に設置され、自然の消滅はさらに急速した。

自然と共に生きてきた動物達は行き場を失くし、その多くが悲しみながら死んでしまった。

唯一機械が設置できなかった場所があり、そこには世界が失った自然が生き残っていた。

だがそれも時間の問題となり、力を蓄えた機械がその場所に手を伸ばし始めた。

吸収するのに他よりも時間がかかることが幸いとなり、自然の完全消滅にはまだ猶予が残されていた。

自然を失った場所は、荒野となつて生きる命を苦しめていた。

誰もがこのまま世界は死んで行くと諦めていた。

友人の手紙

それから数年後、世界はほとんど自然を失った。

変わらず機械は残っている自然の力を吸い取っていて、誰もが生きる希望を失っていた。

そんな世界の片隅にある、未だ自然が残された場所に、小さな村が存在していた。

そこに住む少女^{レム}。

レムは小さい頃に機械を止めに向かった両親と離れ離れになり、この村に自力で辿り着いた。

物心ついた頃から、他者には見えない存在を見ることができたり、人では無い者の声を聞くことができることを知った。

それを他人には打ち明けられないようにしていたが、村の人々の暖かい言葉を受け、レムはその力のことを話した。

それ以来、不思議な出来事が起きると、彼女が呼ばれて解決するようになった。

そんなある日、レムは一通の手紙を受け取った。

送り主は以前住んでいた街の友人だった。

懐かしい気分に浸りながらその中身を取り出して黙読する。

「親愛なるレムへ

久しぶりね、元気にしてた？

貴方が元気なら私はもっと元気になれるわ。

と言いたいところだけど、貴方をお願いがあるの。

私達の住む地域にも機械の脅威が迫ってきたの。

これ以上自然を失ったら私達は生きていけないわ。

お願い、私達を助けて欲しいの。

手紙と一緒に街までの地図を入れておいたわ。

貴方に会えることを心より願っているわ。

貴方の心からの友 ユリより」

友人からの助けを求める手紙に、レムは驚きを隠せなかった。

手紙と一緒に入っていた地図を見ると、記憶の中に記された昔の地図とは全く別物だった。

それだけ地形が変わり、世界が歪んでいることを知った。

レムは友人を助けるために、旅の荷物を揃えて動物達と話した。

「これから私は友達を助けに行くわ、何をすれば助けられるかわからないけど、何もしないよりはマシだわ」

だからお別れよ、と付け足して動物達と抱擁を交わす。

さまざまな動物達の返事に頷いて答え、レムは一人、荒野へと旅立って行った。

荒野の街

村を旅立って数ヶ月、レムは長い旅をしながら世界の姿を見ていた。記憶に残るあの草原や、地平線にまで広がっていた花畑が、今ではどこにも見当たらなかった。

何故機械は設置されたのか、レムはその理由を見出せずにいた。そして友人の住む街へ到着すると、レムは街の姿に驚いた。小さい頃に記憶した、緑溢れる街とは正反対で、廃れた家々がそこに並んでいた。

街を徘徊する人の姿も、以前とは全く違っていた。

レムはそんな人々の横を通り抜け、友人の家へと向かった。

記憶が正しければ、目の前にある赤い屋根の家が手紙をくれたあの子の家だ。

扉にノックをして友人の名前を呼ぶ。

「ユリ、私よ、レムだよ、ここを開けて」

そう言っただけしばらくすると、扉がゆっくり開いて中から少女が顔を見せた。

「レムなのね！良かった、さあ早く中へ入って」

友人のユリは、レムを引つ張るように中へ招き入れた。

嬉しそうなユリの声に思わずレムは顔を綻ばせた。

家の中は以前よりも質素な物に変わっていたが、雰囲気は大して変わっては無かった。

部屋の真ん中にあるテーブルを挟んで座り込み、レムはユリに手紙のことを尋ねた。

するとユリは少し悲しそうな顔をして口を開いた。

「機械が世界の自然を奪っているのは知ってるよね？あの機械を止めるためには、機械の声を聞く事ができる人間にしか止めることができるんだって、それを聞いてレムならって思ってた」

ユリはレムが昔に一度だけ無機物と言葉を交わしている光景を目に

したことがあった。

その事を思い出し、機械の声も聞く事ができるかもしれない、と思つてレムに手紙を出したと言つ。

「そう…でも機械はとても強いと思つし、例え声を聞く事ができても話をしてくれるかどうか…」

確かに声を聞く事が出来る可能性はある。

だが話が出るレムにしか知らないこともある。

無機物であっても、年数が多ければ多い程年を取っている。

人間と同じように若者もいれば年寄りもいる。

機械がレムより年を取つていて、尚且つ強い存在であれば、レムは機械と真正面から向き合うことが出来ない。

「どうして自然を奪うのか、機械にしか分からないことがあるから…機械と話が出来なきゃ何にも出来ないわ」

レムが悲しそうにそう答えると、何処からか小さな声がレムに話しかけてきた。

『大丈夫だよ、君ならきつと機械の声を聞いてあげられる』

優しいその声は、家の中に入り込んできた鳥のものだった。

「本当なの？」

『ああ、君はとても優しい子だ、僕達みたいな動物とも話ができるのもその優しさがあるからだよ』

鳥はレムの肩に止まり、口ばしで羽を毛繕いしながら続けた。

『僕達は機械の声を聞く事ができる、でも機械は人間に自分の声を聞いて欲しいみたいなんだ、だから聞いてあげて、彼らの声を』

鳥の頼みに、レムはしばらく考えた末、強く頷いた。

その答えに嬉しそうに羽を広げた鳥は、家の中を旋回した後、窓から外へと去つて行つた。

「レム、あの鳥と話してたの？」

「うん、あの鳥は私に機械の想いを伝えに来てくれたのかもしれないわ」

レムはニコリと笑つとユリに決意を告げた。

「私が機械の声を聞いてくる、そして自然を返してっってお願ひしてくるわ」

「本当！やってくれるのね、本当にありがとう！」

レムの言葉に心底嬉しそうに、ユリは笑って感謝した。

その日はもう夕暮れに近い時間だったことから、レムはユリの家で一晩泊まらせてもらうことにした。

最初の機械は隣町にあり、そこから進もうと決めると、一気に押し寄せてきた睡魔に身を委ねた。

機械の声 - 怒 -

翌朝、レムはユリに別れを告げて隣町へと向かった。

以前までには無かった砂漠が、レムの行く手を阻んでいるように思えた。

砂漠の砂からは、枯れていった花や草の悲しい声が伝わって、レムの心を悲しみに染めた。

もう一度綺麗な花を咲かせたい、太陽の光をいっぱい浴びたいという、自然の残滓の声があちこちから湧き出るように聞こえる。

彼らの想いが自分の事のように思えて、知らぬ間に目からは涙が溢れ出ていた。

レムはその声にひたすら耐えて街を目指した。

やっとの事で辿り着いた隣町だったが、やはりユリのいた街と大して変わらなかった。

疲れ果てた人々があちこちで横たわっていて、目を閉じれば死んでいるように見えてしまう。

レムは機械のある場所について、いろんな人に尋ねて回った。

誰もが口を揃えて言う場所が街の北にあるという。

その場所に向かおうとすると、一人の女性に声をかけられた。

茶髪のポニーテールで、ぽっちゃりした体型の女性から、母親のような雰囲気を感じられた。

「お譲ちゃん、もしかして機械の声を聞く事ができるのかい？」

「はい、自信はあまりありませんが、やってみようと思います」

レムがそう答えると、女性は目をパチクリさせて、次には心底嬉しそうに微笑んだ。

ポケットから小さな鍵を取り出すと、それをレムの手に乗せてぎゅっと握った。

「こんなに小さいのに、お譲ちゃんは偉いね、貴方の勇気がもしか

したら世界を救ってくれるかもしれないね」

「そんなことないです、私に出来るのならやってみたい…ただそれだけなんです」

「それでも貴方は偉いわ…この鍵はおばさんからの贈り物として受け取っておくれ、何かを開けるみたいなんだけど、何に使っても合わないんだ、何かに役立つかもしれないから持っておくれ」

女性の頼みにレムは微笑みながら頷いて答えた。
その鍵は複雑な模様が装飾されたもので、その模様が何かに似ていた。

首に吊るせるよう紐を通して下げると、レムは女性と別れて北を指した。

街から離れてしばらくすると、目の前に大きな黒い無機物が現れた。これが人の言う機械であることに間違いは無かった。

初めて機械を目の前にしたレムは、緊張と不安に押しつぶされそうになりながらも、おばさんから貰った鍵を握り締めて勇気を出した。
「あの、もし私の声が聞こえたら答えてくれませんか？」

人から見たら可笑しな光景に見えるが、レムは全く気にしなかった。もしかしたら返事をしてくれないかも。
そんなこと思っていたときだ。

『お前は…？』

低い声が上がってきた。

はつとして機械を見上げると、赤いランプが何度か点滅していた。声に合わせてランプがチカチカと光っていた。

「私はレム、貴方の声を聞きたくて来たの」

『レム：我等の主ではないのだな、ならば今すぐ立ち去れ、私がお前を殺してしまう前に』

機械は低い声でレムにそう警告した。

だがそれだけでレムは引き下がらない。

「お願い、私に貴方の声を聞かせて、貴方達の主って誰？どうして

殺したりするの?」

懸命に声をかけて、機械の返答を待つ。

すると、機械は何を思ったのか、一本のコードをレムの前に突き出した。

そのコードの先には、小さい鋭利な物が嵌め込まれていた。

『私がこれに命じれば、これはお前を切り裂くだろう、それでもお前は私の声を聞きたいと言うか?』

機械はコードをさらにレムへと突き出した。

あと少し前に出せば、レムの白い喉は切り裂かれてしまうかもしれない。

それでも、とレムは始めた。

「私は貴方の声を聞きたい、貴方の声を聞いて、貴方の想いを私も感じたい」

澄んだレムの声が、機械の中へ吸い込まれた。

微かに反響しているのは、機械の中でレムの声が飛び回っているからだ。

「そして私も聞いて欲しいの、どうして自然を奪ったのか、貴方は誰にその役割を与えられたのかを」

『…』

「お願い」

その一言がとても儂いモノに感じられた。

機械はレムの想いを理解したのか、コードを下げレムを近くへと導いた。

どうやら心を開き始めているようだ。

「ありがとう」

『…』

「貴方はどうしてそんなに怒ったフリをしているの?」

『それはフリではない、本当に怒っているのだ』

相変わらず低い声だが、先ほどとは少し違う様子だった。

レムが機械が自分から話してくれるのを待っていると、自ら機械は

語りだした。

『我等は誰に作られたのかさえも分からない、生み出された時に与えられた【自然の力を吸収して、新しい力にする】役割だけを頼りに今まで起動してきた』

そこで少し間を置き、再び語る。

『我等は親を知らぬ、役割を果たそうとすると、主に喜んでもらえていると信じていた…だが世界を見て思ったのだ、こんな光景を生み出すために我等は作られたのかと…そして想いは怒りに変わった、我等を生み出した主への怒りは、未だに収まらないままだ』

レムは機械の声をやっと思ひこむことができた気がした。

この機械は自身の創造主に対して怒りを持っている。

それに機械自身も自然を奪うことに悲しみを感じている。

レムは少しだけ希望の光が見えたような、だが反面切ない気持ちにもなった。

「機械さん、私は貴方にお願ひがあります、聞いてもらえますか？」

『何だ、小さなレムよ』

「私は貴方の声を聞いて、貴方の心を少し理解出来た気がします、今の貴方になら願ひできることです…自然を奪うことを…止めてくれますか？」

レムの目には涙が浮かんでいた。

自然の力を奪う行為を止めることは、機械にとっては眠りにつく事を意味している。

奪うだけの存在でしかないからといって、機械を責める理由にはならない。

そして彼を強引に起動停止させる理由にもならない。

レムはそれを承知で機械にそう頼んだのだ。

『私が止まれば確かにほんの少しの自然は戻るだろう、だが他にも機械は存在する、私を説得できても他の機械を説得できる自信はあるか？』

機械は優しい口調でレムにそう問いかけた。

自分の想いを黙って、しつかり聞いていてくれたレムにだからこそ、機械はそう言った。

レムは機械の言葉を一つ一つ受け止め、じつと考えた。

だがこうして機械の一人と心を通わせられたことに、レムは自信を持っていいんだと強く言い聞かせた。

「私は貴方達と人間を繋ぐ橋になりたいです、皆は貴方達のことを怖がっているけど、私が皆に貴方達の声を伝えれば、きっと分かってくれるはずです、だから他の機械さんにも会いにいかなきゃ」
レムの答えに、機械はランプを点滅させて答えた。

『お前なら大丈夫そうだ、さあ小さなレムよ、仲間の声を聞いてやってくれ』

そう言うと、機械は無言になってしまった。

赤いランプも光を灯すことはなく、コードも地面に横たわっていた。

機械はレムのことを信じて眠りについた。

レムは機械に優しくキスをして御礼をすると、街へと帰った。

彼女の歩いた後には、小さな花が咲いていた。

自然の再生

機械と別れて街へ帰ってくると、レムは街の変貌に開いた口が閉まらなかつた。

先ほどまで廃れていた街が、自然を取り戻し、以前の街の姿を取り戻していたのだ。

萎れた花のような人たちが、自然を見つけるとは輝いた笑顔を浮かばせて喜んでいた。

「あらお譲ちゃん！今帰ってきたのかい？」

鍵をくれたあの女性がレムの元へやってきた。

どうやらレムの帰りを待っていてくれたようだ。

「先ほどはありがとうございました、えっと……」

「ああ、名乗るのを忘れてたね、アタシの名前はカルシナだよ」

カルシナと名乗った女性は、微笑みながらレムにウインクした。

それからカルシナはレムを連れて街の中を案内した。

自然が戻った街の中は、緑が溢れて、レムの記憶の中にある故郷の姿に似ていた。

それからカルシナはレムを自宅へ招き入れて、レムに機械のことを尋ねた。

「街に自然が戻った時はすごかったよ、街の中心から花が咲いて、草木も一気に広がってね、アタシは思ったよ……お譲ちゃんが機械の声を聞いてくれたんだって」

「はい、機械は私に声を聞かせてくれました、機械も自然を奪って行くのは嫌だと言っていました、他の機械の声も私が聞きに行つて早くその辛い役割を終わらせてあげたいんです」

「どうやらお譲ちゃんと機械にしか分からない何かがあるんだね、でもアタシはお譲ちゃんが機械とアタシ等人間を救ってくれると信じてるわ」

カルシナはそう言うと、柵から小さな箱を取り出してレムの前に差

し出した。

開けるよう促されて箱をゆっくり開けると、中には青い水晶のペンダントが入っていた。

勾玉の形をしたその水晶を見てからカルシナの目を見ると、カルシナがその水晶について話を始めた。

「それは私の先祖が持っていた水晶なんだけどね、その水晶は機械の体内から見つかったらしいの…だからもしかしたらその水晶もお譲ちゃんにあげるわ」

「えっ？でも…鍵も頂いているのに、大事な水晶まで…」

「いいのよ、アタシ達に出来ないことをお譲ちゃんが頑張ってるんだもの、アタシに出来ることなら何でもするわ」

そう言われて、レムはその水晶を受け取らざるを得なくなった。

清水のように透き通った水晶を大切そうに取り出し、首に下げている。

すると、部屋の中にあつた花瓶に一本の花が咲いた。

二人はその現象に目を丸くし、互いに顔を見合わせた。

そして暫しの沈黙の後、内から湧き上がる喜びに堪え切れず、お腹が振れるくらい笑った。

「これから何処へ向かうの？」

家の前でカルシナが何気なくレムに尋ねた。

レムは首を傾げて少し考えるが、特にこれといった情報が無いため、目的地が見つかっていなかった。

困った顔を見せるレムに、カルシナが一枚の地図を差し出した。

受け取って地図を見てみると、そこには機械についていたランプに似たマークがあちこちにあった。

「これは…？」

「自然を取り戻してくれたし…饑別よ」

カルシナはそう言ってウインクした。

なんだか誤魔化されている気がするが、レムは有難く受け取った。

「ありがとうカルシナ、私もう行くね」

「いいのよ、お譲ちゃん頑張ってるね」

レムはカルシナと軽く抱擁すると、次の目的地へと足を進めた。

神秘の使者

レムがカルシナと別れてから数日経ったある日のことだった。レムは地図には記されていない不思議な森を見つけた。

世界が荒野化している中で、なぜこの森は潤いを保ったまま生き続けているのだろうか。

そんなことを考えながら、レムは森の力に引き寄せられていることに気付かないまま、木々の合間を通って奥へと向かった。

青々とした木々の葉に、甘い匂いを放つ綺麗な花々がレムの好奇心を煽り、まるで迷子を誘うように招き入れているようであった。

「こんなに素敵な場所があったなんて…知らなかったわ」
レムはしばらく森の中で自然に触れることにした。

楽しい時間があったという間に過ぎていくと、どこからか女の子の声が聞こえてきた。

「ここにいちや駄目です」

幼い女の子の声に、レムは、はっとして辺りを見回して声の主を探した。

視線の先には、青白い光が現れ、そこから小さな翼を持つ種族・妖精が音を立てずに現れた。

「貴方が私を呼んだ妖精さん？」

「そうです、私の名前はフィー、この森の管理をしている一人です」
妖精のフィーは、桃色の長髪に白地の守護着を身にまとって、白い肌に青くて大きな瞳が特徴だった。

優しい雰囲気を持つフィーだが、人間よりも長く生きる種族の一員としてか、どこか神秘的で気高いオーラも垣間見えた。

「どうしてここにいてはいけないの？」

「ここは迷いの森と呼ばれています、人間が入り込むと二度と帰れなくなるようになってます」

「二度と？じゃあ私は帰れないの？」

ファイの言葉にレムの表情が険しくなった。

レムはこうして妖精と話せることもできるが、所詮は人間なのだ。どんな力を使えようと、生身の人間は長い年月を世界と共にする彼らには抗うことすらできないのに等しい。

ファイ達妖精の機嫌を損ねれば、最悪の場合、レムは森から生きて出ることは許されなくなる。

「ごめんなさい、とても素敵な森だと思ったので入ってしまったの、すぐに帰るわ、だから許して」

必死に謝ってファイに許しを乞うと、ファイは慌ててレムの目の前に降りてくると、困ったように笑った。

「貴方に謝らせるつもりはなかったのですが…大丈夫ですよ、貴方はとても正直な人の子です、森はきつと貴方をお許しになってくれますよ」

ファイの優しい声に、レムの表情はぱあっと明るくなった。

そして森の許し、という単語に引っかけたファイにその事を話した。

「あの、森の許しって、森の主がいるのですか？」

「ええ、この森の主は私達妖精の王、トリエツサ様が主の座に居られます、トリエツサ様がお許しになれば、きつとお話を聞いて下さるでしょう」

「ファイさん、トリエツサ様に会わせて下さい、いろいろ聞いてみたいことが出来ました」

「分かりました、では迷わないようついて来て下さい」

ファイはレムの前に立って森の奥へと向かいだした。不安と期待を胸に、レムは慎重に森の奥へと進んだ。

「ここがトリエツサ様がいらっしゃる祭壇です、ここからは貴方しか進むことが出来ません」

「分かりました、ファイさん案内ありがとうございました」

レムは深く頭を下げ、礼を述べると、フィーと別れて妖精王の祭壇へと足を進めた。

周囲の雰囲気は、同じ世界にあるとは思えないほど神秘で幻想的なものだった。

澄んだ空気が頬を軽く撫で、緊張して震えるレムを優しく包み込んでくれるようだった。

目の前に迫る光の壁の向こうに、恐らく妖精王がいるだろう。

レムは無意識に両手を強く握っていた。

大丈夫、と小さな声で自分を励ますと、意思を強く持ち、トリエツサのいる領域へと消えていった。

妖精王の答え

光の壁を抜けて中へ入ると、そこには草原が広がっていた。足元を染める緑色の絨毯と、頭の上を駆け巡る青色の天井と真っ白なクッション。

その間にいる、人では無い特別なオーラを放つ一人の妖精。それが妖精王のトリエツサであることにレムは気づいた。

声をかけようか、もつと傍まで近づこうか迷った末に出した答えは、声をかけることだった。

「えつと…トリエツサ様、ですか？」

レムの遠慮がちな呼び声に耳を傾け、ゆっくりと彼女の声に答えるように振り返った。

真っ白な長髪は王の足元まで伸び、黒い外套がその白さを引き立てていた。

髪の色に負けないほどの白い肌に、黄金の瞳を輝かせていた。

フィーとはどこか似た雰囲気を漂わせるが、気高さや存在感は比べ物にならなかった。

「よく来たね、他の種族に耳をすます優しい人の子よ」

深みのある低くも高くも無い、心地よい声がレムの体を包み込んで緊張を解した。

「私がトリエツサだ、聞きたいことがあるようだね…それも、機械達のことを」

「どうしてそれを…？」

口にも出してなかった質問を、トリエツサにあっさりと見抜かれて驚くと、トリエツサは面白そうにくすくと笑った。

「君が正直なおかげだよ、そして機械の一つの声を聞いてくれた君だからだよ」

「そう…なんですか？」

「そういうことなんだ、そして君が機械達のことを考えていること

に世界は希望を見出した」

トリエツサは両手をレムの肩に乗せ、優しく微笑んでそう言った。彼の周りを飛び回る風達が、レムの体を包み込むようにグルグルと巻きついてきた。

それは不快とはかけ離れた感覚で、どこか懐かしい温かさを与えてくれた。

世界は君を祝福している、とトリエツサは口を開く。

「機械達は、ある人間によって世界に設置された、そして新たな力を生み出す為にと自然の力を奪い取った…」

「人間が？どうして人間が新たな力を欲するのですか？」

世間とはかけ離れた場所に暮らしていたレムには、その人間の気持ち^ちが分からずにいた。

自然に守られ、さまざまな知識を与えてくれた自然は、レムにとっては親同然と言っても過言ではなかった。

レムの質問に何と答えてよいのかと、トリエツサは眉を^{ひそ}めて額に手を押し付けた。

純粹過ぎる人間の子に、墮落した人間のことを話すのに少なからず抵抗があつた。

だが人間の子である彼女には、真実を話さなければ永遠に無知と終わるかもしれない。

様々な考えを巡らせた結果、トリエツサは口を開いた。

「人間という種族は力を求めてしまうんだ、いろんな理由があるけれど、新しい力で未来の道を見つけようとしているんだ、心の澄んだ者ならば光を、淀んだ心の者ならば闇を求めてね…」

「光と闇…？それは私にもありますか？」

「ああ、人間以外にも、私達妖精族にも、どんな命にも明暗はあるのさ…では、本題に戻ろうか」

これ以上は彼女の好奇心が闇を呼び寄せかねない。

世界の構成に携わる妖精王には、精神を構成する二つの異物…光と闇の動きが分かる。

辺り一面に蠢く闇の気配に、トリエツサは気づいていたのだ。

その闇に近づけさせないよう、自分の領域には光の壁を張り巡らせて守っている。

「君は機械達の声聞いてあげてくれ、そして彼らの親を見つけて欲しいんだ…きっと機械達の傍にいる、今は彼らの声を受け止めてあげてくれ」

「今はそれが私に出来ることなんです…分かりました、頑張ります」

これから進む道が見え始めて、胸の奥に希望の光が差したレムの表情は輝いていた。

レムの表情に安堵したトリエツサは、周囲の闇の気配を気にしながら光の壁を解いた。

そして外への扉を作り出すと、レムの手を引いて、彼女の手をドアノブにかけた。

「君がこの森を訪れるのは、恐らくもう無いだろう…でも忘れないで欲しい、私も世界も、必ず君を守る…恐れる者は何も無い」

「はい、ありがとうございます…お元気で、トリエツサ様」

レムの別れの言葉が紡がれた瞬間、扉は意志を持っているかのように勝手に開き、レムを自らの内側へ引き込んだ。

不意に起きた事に驚きながらも、レムは遠ざかるトリエツサの姿を見つめた。

もう会えないかもしれない、そう思うと胸の奥が締付けられ、目の奥がちりり、と熱くなった。

光の中に吸い込まれながら、レムは見えなくなった妖精王のことを思い、外の世界に出るまでの間を静かに過ごした。

レムを見送ったトリエツサの隣にフィーがふわふわ浮きながらやってきた。

「行ってしまいましたね、妖精王様」

「そうだね、でも彼女はここにはいけない、彼女の居場所は人間の住む場所、世界が滅びへと向かう中で、彼女が唯一の光となる

だろう…我々はまもなく世界の一部分となる、彼女に未来を託して見守ろう」

悲しげな表情を浮かべるフィーに、トリエツサは優しく微笑んでそう言った。

二人の体からは青い光の粒子が音も無く出ていた。

それは妖精の体を構成する物質の一つで、その光が失われると自然に消滅してしまうという造りだった。

森が死ぬ時は妖精も共に死ぬ、という掟により、迷いの森と彼らはあと少しで世界から消えてしまう運命だった。

「彼女には悲しみを与えたくなかった、希望は輝かなければ世界に届かず消えてしまう…だから世界に返したんだよ、フィー」

「分かっていますよ、トリエツサ様…そろそろお時間ですね」

体の光が失われようとしていて、フィーの目には涙が浮かんでいた。消えるのが怖い、トリエツサはフィーの感情を感じ取っていた。

トリエツサはフィーを抱き寄せると、壊れ物を扱うように優しく抱きしめた。

「大丈夫だよ、大丈夫…君は一人ではないんだからね」

不安を拭い去るその声は、フィーの頬を緩ませていた。

光が一層強くなったとき、森の泣き声が聞こえた気がした。

青い光と真っ白な光が混ざり合って消えた後、そこには小さな木の子供が強く根付いていた。

機械の声・哀・

温かな光に包まれていたはずが、いつの間にか砂の上に眠っていた。だるい体をゆっくり起こして周囲の様子を窺った。

微弱の風が砂を身に纏まといながらレムの周りを横切っては、当てもなく去って行った。

空は灰色に近い色に塗り潰され、すっきりしないレムの気分を表しているかのようだった。

「妖精さん達、どこに行ったのかな？」

森の消滅を知らないレムは、消えた妖精達を探そうと周囲を隈なく探したが、影も形も見えなかった。

「皆いない…ここはどこ？」

レムは不安に押し潰されそうになりながらも、機械達の声を探して歩き回った。

しかし、行けども行けども同じ景色が広がるだけで、機械や人はおろか、生き物の姿さえない。

カルシナに貰った鍵を握りしめ、砂に足を取られそうになりながらも、何かに命じられているように歩き続けた。

足が真つ白になって、靴の中に砂が溜まりこんだ頃、レムの耳に小さな泣き声が聞こえてきた。

はっとしてレムはその声に耳を傾け、ゆっくりその声に歩み寄って行った。

声を辿たどった先には、砂を身に纏まとった大きな竜巻がいた。

まるでレムの行く手を阻むかのようにその場に聳そびえる竜巻は、ごうごうと大きな音を立てながら回り続けていた。

「竜巻さん！お願いです、私を泣いている人の所に行かせて下さい！」

竜巻に向かって命一杯声を出して頼むと、竜巻から返事が返ってきた。

『お前はワシの声が聞こえるのかのお？』

「聞こえます、貴方の優しい声が聞こえますよ、竜巻さんお願い！この先で泣いている人の許もとに行きたいんです！」

竜巻の老人は、レムを珍しそうに見下ろし、じっとその場で考えた末、彼女の願いを叶えてあげた。

『この先には機械というヤツがおるぞ、どうやら生まれた時から泣き続けているようじゃ、泣き止ませてくれ』

「わかったわ、ありがとう竜巻さん」

レムは竜巻に礼を言っていると、その先にいる機械に会う為、先へ進んだ。

それからまた砂に足を取られそうになりながら、レムは懸命に声の許まで歩いた。

砂が風に乗って舞い踊る先に、黒い大きな物体が現れ始めると、レムはすぐに駆け出した。

赤いランプ、真っ黒な体、鈍く光る硬い姿。

その三つの要素を見出した瞬間、この機械が泣いていたのだ、とレムは確信した。

「ねえ、貴方が泣いていたの？」

『えっ？君はボクの声が聞こえるの？』

レムが機械に声をかけると、すぐに泣き止んではレムの姿を確認するかのようにランプを点滅させた。

声からすると、幼い男の子のように思えた。

「そうよ、私の名前はレム、ねえどうして泣いているの？」

『それはボクが自然を奪っちゃうからだよ…』

しょんぼりしたように点滅が弱まり、機械は再び泣き出してしまった。

困ったレムは、なんとかして機械を泣き止ませようと奮闘するが、どうやっても泣き止んでくれなかった。

と、レムは話を変えようと、カルシナに貰った鍵を機械に見せた。

「ねえ、貴方はこの鍵が何の鍵か知ってる？」

服の中から鍵を引っ張り出して機械に見えるように差し出すと、機械の泣き声が止まり、差し出された鍵にコードがゆっくりと接近した。

『これは長のモノだよ』

「長？それは貴方達の仲間？」

『うん、長は僕達機械のリーダーだよ、最初にこの世界に作り出されて設置されたんだ、その鍵は長を封印する為の鍵だよ』

「えっ……」

レムは機械の言葉に、言葉を失った。

カルシナが与えた鍵にそんな役割が込められているとは思ってもしなかつたからだ。

そしてレムは考えた。

（私がこの鍵を持っている、だとすれば私が機械達の長を停止させる事になる、でも何で長だけ鍵があるのだろうか？）

不思議に思ったレムは、機械にその事を尋ねてみた。

すると、機械はとても悲しそうな様子でレムに教えてくれた。

『長はね、僕達が生まれる前に一度封印されているんだ、僕達の親に逆らってね…僕達が全員設置されると、長は封印を解かれて心を取り除かれてしまったんだ』

それでね、と機械は続ける。

『長は親の命令にしか従わない、無感情の機械に変わってしまったんだ、それ以来僕達の前には現れなくなつたんだ』

「そんな事があつたのね…酷いわ、自分の野望の為に心を奪ってしまふなんて…」

機械の話を黙って聞いているうちに、レムの目からは涙が溢れ出ていた。

己の願いを叶える為に他の力を利用して、用が済めば捨てる。

そんな人間も少なくは無かつた。

助け合う思いを利用され、希望の光が見えた瞬間に絶望の底に叩き

落されてしまっ、そんな思いをしてしまっ人間も少なくなかった。例え冷たい機械の中にも、人間と同じように心はあるのだ。

その心を奪うことは、人を一人殺すのに等しい罪だと、レムは思った。

『レム、君の事はアングから聞いているよ、とても怒りっぽい彼が君を信頼していると聞いてね、僕はずっと待っていたんだ、君に救われるために』

「アング：あの機械さんね、私もたくさん教えてもらったわ、とても感謝してるの」

レムは以前出会った機械のことを思い出した。

彼の名前がアング、というなら目の前にいる機械には何という名前がつけられたのだろうか。

「貴方の名前は何ていうの？」

『僕？僕は泣き虫だからクライだよ、長にも名前があるんだけど、教えてくれなかったんだ』

「そう…クライ、アングから聞いているなら分かっていると思うのだけど…」

レムはクライにその胸のうちを明かした。

自然の力を奪ってしまう機械達を、悲しみから救う為に停止を頼んでいることを。

『そうだね、僕もそろそろ眠らなきゃいけないね…レム、僕とつても嬉しかったよ、君達人間と一度でもいいから話してみたかったんだ、だから…君の願いも聞かなきゃね』

さよなら、と最後に付けて機械のクライは起動停止した。

聞こえなくなった声に、レムは悲しくなって泣き出した。

泣き虫の彼の代わりに、たくさん泣いてあげようと、涙が枯れると思うほど泣いてあげた。

クライが起動停止した後、クライの周りが緑色に変化していった。

曇っていた空もいつの間にか澄んだ青い空に移り変わってた。

レムはその光景を見た後、あるものを見て小さく笑った。

それは、地平線に薄っすらと見えた虹だった。

大雨から晴天になれば、虹が出る。

それはまるでレムを励ましているように思えた。

「クライ、私頑張るね」

レムはクライに別れを告げると、緑色に染まる大地をゆっくりと歩き出した。

水晶の声

クライと別れて数日間、レムは砂漠に住み着く小さな民族の村で過ごした。

その民族の人たちは、昔から精霊や妖精を信じ、崇拜してきたという。

赤土の色に染まったブカブカのローブを身に纏い、何かを表したような模様や紋章が縫い付けられていた。

レムを迎え入れてくれた民族の一人、占い師のエレナは、レムと同じように他の種族声を拾い、解決する術を知っていた。

レムが今までの経緯を話すと、エレナは快く迎え入れてくれ、村の仲間にも紹介してくれた。

レムはエレナに機械の在り処を尋ねてみた。

カルシナがくれた地図を広げてみたものの、現在地が分からないとなると、何処へ行けばいいかレムには分からなかった。

そして周辺の土地勘を持つエレナに聞けば何か掴めると思ったからだ。

「そうね、この辺りはユーネリア地方と呼ばれているわ、そしてこの砂漠はその地方の真ん中に位置する、機械は…すぐ傍にあるわ」

「本当！ありがとうエレナ、貴方に聞いて良かったわ」

「いいのよ、同じ力を持つ者同士だもの、それに…私も一つ君に聞きたいことがあるの」

「聞きたい…こと？」

レムの顔が喜びの表情からキョトンとした表情にくるりと変わると、エレナはレムのある物を指差した。

それはレムの首に吊るされた青い水晶だった。

それに目を向けて、右手に乗せてじっくり見つめた。

水晶は部屋に差し込んできた夕日の光に照らされて、幻想的な輝きを放っているだけだった。

「これはカルシナに貰ったの、機械の体内から発見されたんだって」
「機械の体内から…その水晶にはとても強い思いが込められているわ、これは人間の思いの残滓^{ざんじ}よ」

「えっ？この水晶に？」

エレナの無感情な声で告げられた事に、レムは驚きを隠せなかった。そして同時にある人物がレムの脳裏をよぎった。

それは機械達の親、製作者である人間のことだった。

機械の体内を知る製作者なら、その水晶についても関係している可能性がある。

そして人間の思いの残滓なら、その製作者の思いが込められているのかもしれない。

そう思うと、レムは水晶に込められた思いを知りたくなってしまった。

「ねえエレナ、この水晶に込められた思いを知ることが出来ないかな？」

「そうね、出来るけど…とても強い思いよ、貴方の心が押し潰されかねないわ、それでも良いの？」

エレナの忠告にゴクリ、と唾^{つば}を飲んだ。

心が押し潰されると聞いて、レムは長^{おみ}のことを思い出した。

もしかしたら自分もそうなってしまつかもしれないと思うと、レムの心に迷いが生まれた。

しばらく考えた末に出した答えは、

「絶対に負けないわ、私にはやるべき事がまだ残っているのだから」
だった。

エレナに水晶を手渡し、緊張しながらもその時が来るのを待った。

占いに使う道具を持ち出し、エレナは水晶を紫色の布の上に置いた。その両端に黄金の聖杯を置くと、その中に蝋燭を置いて火を灯した。それらの周囲に色の付いた小さな石をばらまいた。

フードを深く被ると、エレナは両手の小指にシルバーリングを嵌^はめて準備を終えた。

「始めるわ、この布を両手で握って目を閉じて」
渡された布をしっかりと握り、暴れる鼓動を抑えながらゆっくり目を閉じた。

レムが目を閉じたことを確認すると、エレナは特殊な呪文を唱えて儀式を開始した。

創造主の涙

目を閉じていても、嫌なほど分かる想いの強さに、レムはグッと下唇を噛んで耐えた。

何度も想いに引きずり込まれそうになりながら、エレナを信じて待ち続けた。

そして、長い長い耐久戦の末、レムは水晶に込められた意志に接触した。

目を閉じて真っ暗な世界にいたはずが、手品のように一瞬にして辺りが灰色の世界に変わった。

その世界の真ん中に、レムが探した想いがあった。

感覚でしか分からないその意志は、例えるなら白くて丸い球体に、黒い霧が時々薄っすらとかかっていた。

まるで機械達を表したかのような、黒と白に染まった意志は、レムが傍にいても動じなかった。

（とても悲しい…機械達と似ている心、でもこれは人間の意志…）
今まで触れてきた人間の心とは全く正反対なそれに、レムは困惑した。

クライの言っていた製作者が、もしこの心の持ち主だとしたら。

『だあれ？パパの傍にいるのはだあれ？』

「えっ？えっと…私の名前はレムだよ、貴方は？」

突然空から降ってきた雨のように、幼い女の子の声が聞こえてきた。その子の声に驚きながらも、レムは純粹に名前を教えた。

『ワタシは…サクラ、パパの一人娘、ママを見失った一人娘』

サクラと名乗った女の子は、そう付け足すとレムの前に姿を現した。白が混じった桃色の髪に、まるで宝石のように輝く翡翠ひすいの瞳。

年齢はまだ十をいかないと思う容姿だった。

「こんにちはサクラ、貴方はなぜここにいるの？」

『…』

「貴方のパパって」

『レムさん、貴方の想いはとっても純粹で、とっても愚か…でもワタシは貴方が好きになりました、すべてお答えします』
幼女にしては口調が大人びていたサクラは、目を丸くして首を傾げるレムに口を開いた。

『ワタシのパパは…機械達の製作者です、グラドといます、パパはワタシとママをととても大切にしてくれました…でも、ワタシとママが事故で死んで、パパはとても悲しくて泣きました』

サクラの口から紡つむがれる過去に、レムの胸の奥がぎゅっと締め付けられた。

目の前にいるサクラという子も、もう死後の世界の住人だった。

レムには、サクラから生きている頃の思い出が、時々見え隠れしているのが見えた。

暖かな家庭と、幸せな日常が永遠に続くと思っていた家族は、事故をきっかけに切り裂かれてしまった。

その光景と三人の心の叫びがレムを襲い、無意識に鍵を握った。

ほのかに熱を持っていた鍵に励まされ、レムは心を落ち着かせて再びサクラと向かい合った。

『パパはワタシとママを生き返らせようと、未知の力を探して旅したの、そして見つけたのが自然の力だった…』

「サクラのお父さん…グラドさんは二人の為に機械達を？」

『そうよ、パパは自然の力を手に入れようと、試行錯誤して機械達を作り出したの、心を持って自然と繋ぎ合わせ、専用のコードで力を奪っていったの、でも成功しなかった』

サクラの最後の言葉に、レムはクライの言っていた長を思い浮かべた。

もしかしたらそれは長のことを指しているのかもしれない。

支配を逃れようと、必死に抵抗して主人に逆らった機械の長が、心を奪われただけの従順な機械と変貌を遂げてしまったことを。

『そしてパパは…っ！』

話を続けていたサクラに、突然異変が起きた。

すっかり見えていた幼女の姿は、ランプの光のようにチカチカと点滅しているように、現れたり消えたりしていた。

異変に気づいたレムは、サクラへ手を伸ばすが、寸前のところでサクラは姿を消してしまった。

混乱する頭を落ち着かせようとするが、治まる気配は全く無かった。そして世界がグルリと一回転、二回転と回転し始め、不安定な足場に気持ち悪さを抱きながらも、レムは目を閉じて必死に耐えた。

唯一情報を得られる聴覚が敏感になり、あちこちから聞こえてくる声をすべて拾い上げていた。

男性の悲しげな嘆き、女性の悲鳴、機械達の怒りと怯えの声。

様々な声が混じりあい、ついにレムは耐え切れず気を失った。

奪われた泣き声

目が覚めると、そこは見覚えのある部屋だった。すぐそばにはエレナが水分を含んだ冷たいタオルを持っていて、自分が布団の上で横になっていることに気付いた。

「大丈夫？」

エレナがレムの額にタオルを優しく置きながら尋ねた。うん、とレムは一言答えるのが精一杯だった。

口を動かそうとしても、なかなか体全体が言うことを聞いてくれない。まるで何かにとり憑かれてしまったようだった。

「君は水晶の想いと触れたのね、様々な想いが君の周りに漂っているのが分かるわ」

「うん、出会ったの… サクラっていう女の子と」

サクラ、そう言って頭の中であの時の光景を思い出した。突然のことで、あの時は何が起きたのか理解できなかったが、今でははっきりと分かる。

あの灰色の世界が、サクラを取り込んだのだ。

灰色の、粘土ねんどのような何かサクラを覆い隠し、自らを消滅させてレムを現実押し戻したのだ。

「その子がいた世界は、もう消えてしまったの… 消したのは機械のひとつ… 一番大きな機械よ」

「それって!？」

エレナの言葉に目を見開くほど驚いたレムは、その先に待つ答えを知ってしまった。

機械の中で大きな存在、クライの言っていたあの機械。

「長おさがサクラを世界ごと消したと言っの？」

「そうよ、君が水晶に意識を飛ばしている間に、ここへ機械の力が放たれたの、村の皆無事だったけど… 多くの生き物が死んだわ」
エレナの表情に嘘はなかった。

同じ力を持つエレナが、そんな嘘を言う理由も無く、レムはとても悲しくなった。

今までの機械とは全く違うということ、レムはこれで改めて思い知らされたのだった。

「エレナ、私機械を…長を止めてくる、会って心を取り戻して、辛い思いをしなくていいんだってこと、教えてあげたい」

きつと長も苦しんでいるはずだ、とレムは思った。

心が無く、そして主人に命令を下されているなら、逆らえずに起動し続けているのだろう。

レムの決意にエレナは、はっとした顔をしてすぐに微笑んだ。

「君は強いね、誰よりも強い君なら…きつと機械の心も取り戻せるはずだ」

「ありがとう、エレナ」

「それと…これは餞別だ」せんべつ

そう言っただけエレナはローブのポケットから何かを取り出して、短い呪文をそれに向けて言っただけ、それから赤い光が放たれた。

眩まぶしくて思わず目を細めると、エレナはそれを隠すように両手を重ね合わせた。

光が収まると、レムは目を瞬かせてからエレナの隣へ座った。

様子を見ながら手のひらを外すと、その正体がレムに明かされた。

「これは魔術師が守りとして使用する、旋律石せんりつせきという特殊な石だ」

「これを持っていると、私も守ってもらえるの？」

「そうだ、旋律石は持ち主を選ぶ…この旋律石はレムをずっと呼んでいたんだ」

エレナはそう言っただけ、レムに旋律石を渡した。

石が手の平に乗った瞬間、とくとんと石の鼓動が手の平を通じてレムに伝わってきた。

ほのかに温もりを感じて、石も生きていることに感動を覚えた。

長の行為に悲しんでいた自分に、旋律石は、まるで希望を与えてくれたような気がした。

「ありがとう、石に元気を貰ったわ」

「そう、元気になったなら良かったわ…レム、これから君が会う機会は、きつと今までの機械とは比べ物にならないほど強い存在だと思う、でも君には彼らを救う力がある、だから負けないで」

今までの中で一番真剣な表情をして、エレナはレムに彼女なりのエールを贈った。

そのエールに、レムは強く頷うなずいて答えた。

エレナの家から一歩外へ出ると、そこは別世界だった。

空が灰色に染まり、大地は真っ黒に近い色をしていて、まるで世界から色が消えたようだった。

その光景を生み出したのが長だと思つと、レムは複雑な想いになつて、ぎゅっと鍵を握った。

必ず助ける、と最後にエレナと言葉を交わして別れた後、レムは旋律石と青い水晶、鍵を身に付けて村を出た。

風の無い殺風景なその世界の中で、その先に待つ出来事を見据え、同じ力を持つ少女達は、世界の運命を強く見つめていた。

消える自然の先にいる機械と製作者が待つ、未知の場所へと。

繋がりの先に

エレナと別れてから数日後、レムはある場所に来ていた。

そこはレムの両親が眠る墓地だった。

錆びれた鉄の柵を通り過ぎ、墓石に刻まれた両親の名前を指でなぞる。

冷たい墓石からは、生きている鼓動が全く感じられなかった。

他の種族の声を聴くレムの力は、両親が亡くなってから覚醒した。

悲しみと孤独に心を閉ざしかけていたレムを、自然が優しく包んで心を守ってくれた。

その時に自然と心を通わせ、今の力が使えるようになったという。

両親が亡くなって数年経つ今、レムは世界の危機を脱するために頑張っていることを報告しに来たのだ。

「お父さん、お母さん、私はこの世界が大好きなの…私を守ってくれた自然の皆や、たくさんの人たち、機械達が大事ななの、だから私は絶対に諦めないわ」

まるで自分に言い聞かせるかのように、決意を大きな声で口から発すると、満足した表情で微笑み、墓地から去ろうとした。

「君が機械を停止させて回っている子かな？」

「えっ？」

突然前方から声をかけられ、反射的にその声の主を見ると、そこにいたのは黒い衣服を身に付けた男性だった。

短髪の黒髪が風に揺られ、金色の小さな瞳がレムをじっと見つめて離さなかった。

ポケットには、恐らく懐中時計が入っているのか、繋ぎのチェーンがポケットから出ていた。

「貴方は？」

「私の名前かい？もうずっと昔に捨てたよ、名乗る名がないから…ゼロと呼んでくれ」

「ゼロさんですね、私はレムといます、あの…どうして私が機械達と話が出来るのを知っているんですか？」

「ん？それはね…」

ゼロと名乗る怪しげな男性は、レムの質問にニコリと微笑んでみせた。

その微笑がとても不気味で、体中の毛が逆立ってしまったのではないかとつくらい鳥肌が立った。

第六感が警告のサイレンを鳴らし、レムをその場から離そうとするが、体がいうことをきかなかった。

「私は君が捜し求めている存在だからだよ」

「えっ…じゃあ、貴方がまさか…」

そこまでレムが口にしたときだ。

一羽の鳥が男性の顔面目掛けて突進してきたのだ。

不意打ちされた男性は、それを顔で真正面から受けてしまい、抜ける羽を顔に付けて頭をぶんぶんと振るった。

レムはその鳥に見覚えがあった。

その鳥は、ユリの家で出会った、勇気をくれたあの鳥だった。

「鳥さん！どうしてここに？」

『急いでここから離れて！この男は君を殺そうとしているんだ！』

鳥はバタバタと羽をばたつかせてゼロの視界を奪った。

そしてレムに出来るだけ大きな声で、逃げて、と何度も叫んだ。

状況を把握しきれてないレムは、自分が恐怖に怯えて体を震わせている事にさえ気づいていなかった。

動けないレムを、鳥の羽の隙から見たゼロは、鳥を片手で振り払ってポケットからある物を取り出した。

それは、銀色の刃が光る鋭利な武器 ナイフだった。

『駄目！逃げるんだ！』

鳥の精一杯の叫びも、今やレムの耳には届かない。

目の前が真っ暗になりそうで、それでも必死に立っているレムには、ゼロの姿しか捉えることが出来なかった。

「私の夢を邪魔しないで欲しい、君が頷いてくれたら殺さないであげる、でも頷いてくれなかったら…君を排除しなきゃ」

ゼロのどこか楽しそうな声に、びくつと体を大きく震わせる。目の前に恐ろしい獣がいるようなもので、子供のレムにとっては恐怖以外の何者でもなかった。

どうするの、と選択を迫られ、歪んだ笑顔に脅迫され、レムは一瞬逃げてしまおうと考えた。

だがそのとき、旋律石が熱を放ち、レムの手をほんの少し火傷させた。

反射的に石を離してしまったレムだが、石のおかげで正気に戻ることができた。

逃げようとした自分を心の中で叱り、石を拾い上げてレムはゼロを真っ直ぐ見つめた。

強い眼差しに変わった少女の姿に、ゼロはそれが答えと受け取った。「わかった、君は私の敵だ…死んでおくれ」

ゼロが一層歪んだ笑みを浮かべて駆け出し、ナイフをレムに向かって振りかざした。

それでもレムは決して怯むことはなかった。手にはカルシナがくれた鍵、首には同じく貰った水晶、そしてエレナから貰った旋律石。

自分の記憶と心に刻まれた出会いを力にし、レムは心に思った言葉をゼロにぶつけた。

「貴方の娘さんは、なぜ死んだのですか？」

ぐつとゼロの手が止まり、レムはその様子で確信した。

ゼロはあの灰色の世界で出会ったサクラの父親、グラドであることに。

「なぜ君がそれを…？」

ゼロの苦しそうな声に、レムはただ横に首を振って返した。

水晶の中で見たあの世界で、寂しそうにそこにいたサクラを思うと、なぜか口が出来なかった。

鳥がレムの肩に止まり、ゼロ…もといグラドを睨み付けた。

「私は貴方のことを探していました、機械達を苦しめている貴方を…機械の長の心を返してあげて下さい」

「長…長はもう元には戻らない、製作者の私でさえもう」

「勝手すぎるよ!」

グラドが長のことを諦めていると知ったレムは、怒りを抑えきれずに思わず大きな声を出してしまった。

小さな少女の怒りに少なからず驚いたグラドは、はっとしてレムの目を見つめた。

そこには純粹過ぎるくらいの怒りが込められていて、それが自分に向けられていると思うと、何も言えなくなってしまった。

「人間のせいで、機械達も自然の皆も、妖精さんたちも…皆傷ついているんです!貴方の夢が何なのか分かりませんが、貴方は夢のために誰かを傷つけていいと思っっているんですか?」

「それは…」

反論してみようと試みるグラドだが、レムの筋の通った意見に何も返せなかった。

しばらく沈黙が続くと、そこへ一つの足音が聞こえた。

二人と一羽がそちらへ目を向けると、そこにはレムが良く知る人物が立っていた。

「カルシナさん…?」

驚きを隠せないレムに、ただカルシナはふっと笑みを浮かべるだけだった。

弔いの火

「カルシナ…？まさか…お前は！」

グラドの表情がみるみる青ざめていき、体をブルブルと震わせていた。

まるで先ほどのレムのようで、レムは複雑な想いで彼を見た。

「貴方は今、たった一つの希望を消そうとしたね、それがどういう事か…わかるだろう？」

以前会った時のカルシナとは違い、例えば人間の気配があまりしなかった。

違う世界の存在、そんな言葉が今のカルシナには当てはまった。

「カルシナさん、どうしてここに？」

「ごめんねレム、アタシはどうしてもこの男が…いや、人間が許せないんだ」

人間、と言った瞬間、カルシナの体が輝き始めた。

光の中でその人間らしい姿は徐々に変化し、みるみるうちにその姿は他の種族のものとなった。

だがその姿はこの世界に生きる者の姿ではなく、神話の中で語られる女神の姿だった。

「貴方は女神だったのですか？」

女神となったカルシナに、レムは興奮を抑えきれずにいた。

一度だけ聞いたことのある神話の中で、レムがもつとも好きだった女神が目の前にいるからだ。

そんなレムとは対照的に、グラドはこれ以上ないほど怯えていた。天上の住人が目の前にいると考えるだけでも、彼にとってはこの上

ない恐怖だった。

「レム、貴方は以前よりも成長しましたね、ならば分かるでしょう？この男はこの世界だけでなく、いろんな命を弄もてあそんだのです、それを許しておけますか？」

そう問いかけられ、レムは腕を組んで考えた。

普通なら許されない行為で、当然罰を与えなければならぬ。だがレムは違ふと思った。

グラドの行為は許されないが、それには彼の過去と、その行為をさせた理由があつた。

その中で、彼は機械達を生み出し、世界から自然を奪つた。

複雑に絡み合う道のど真ん中に、レムは立っている感覚を覚えた。

「私は誰かに罰を与える事が出来るほどの人間ではありません、それに私は知りたいのです、グラドさんがこのような行為を行った訳を」

それがレムの、今の正直な答えだつた。

真つ直ぐな答えに、カルシナはただ優しく微笑むだけだつた。

そして怯え続けるグラドに目を向け、今度は厳しい目でこう告げた。

「貴方には当然罰を与えます、しかし、レムは貴方のことを知りたかと言つています、ならば彼女の願いに答えてあげなさい」

「私の事を……？知つてどうするんだ？機械の長は止められないんだぞ？」

困惑するグラドは、視線をレムに向けた。

話す相手を変えたという理由と、カルシナと目を合わせたくなかつたという理由でそうしたので。

長を止められない、と何度も言うグラドに対し、レムは力強く横に首を振つた。

「私は必ず長を助けてみせる、そのためには貴方のことを知らなきゃいけないの、長の心を奪つたのは貴方でしょう？貴方の過去に取り戻すヒントがあるなら……私はそれに賭けたいの」

レムは決して意思を曲げなかつた。
グラドに対する想いは複雑だが、今彼に罰を与えても世界が救われるわけでもない。

ならばグラドにも協力をしてもらい、世界を救う作業に携わつて欲しいと思つた。

レムの意思が絶対に曲がらないと分かったグラドは、どこか懐かしそうに、優しい目でレムを見つめた。

「分かった、君の意思は絶対曲がらないようだからね…私は確かに失ったよ、大切な家族を…君はもしかしたら知っているかもしれないが…」

「知っているわ、サクラでしょう？」

「ああ、サクラは君に似てとても心の澄んだ強い子だったよ、でもサクラは死んでしまった…自然災害でね」

「自然災害？」

「そう、あの子は地震で地面が割れた場所に運悪く落ちてね、それでも私はとても悲しかった…やるせない思いで、自然に怒りをぶつけるしか他に方法が無かった」

淡々と過去を明らかにしていくグラドの目には、いつの間にか涙が浮かんでいた。

やり切れない想いをどこかにぶつけたくても、ぶつけられる場所も無ければ人もいない。

そんな中で考え付いた先が、自然への復讐だった。

そして奪い去った力を使って家族を蘇らせようと考えたと言う。すべてを語り終えた後、グラドはもう一度レムを見つめた。

今度は何処かやり切った表情で、話したらすっきりしたとでも言いたそうだった。

レムはその表情が、どこか悲しげに見えて、我慢していた涙が一気に溢れ出した。

ボロボロと大粒の涙が目尻から流れ落ち、歪む顔をそのまま曝け出して泣いていた。

「レム…大丈夫？」

カルシナが心配そうに見守るが、レムの涙は一向に止まらない。

その涙が誰に向けられているのかも分からず、ただ溢れる感情に戸惑いながら、レムはこれが切ないということを感じた。

同情も含まれているかもしれない、それでも今はただ涙を流してい

たかった。
それがレムの正直な想いだった。

レムがやつとの事で泣き止むと、グラドは苦笑しながらレムのすぐ傍まで動いた。

「私なんかのために泣いてくれてありがとう、たとえそれが同情でも嬉しいよ」

「ごめんなさい、貴方のこと…心の底では悪い人だと思ってた、でも貴方にも悲しみはあったのね…知らずに酷いこと言ってごめんなさい」

そこでレムは一度区切ると、涙を拭ってもう一度口を開いた。

「でも長の心を奪ったことには変わりありません、お願いです！私に力を貸してください！長を助けられたら、きっと…ううん、絶対に世界は自然を取り戻してくれるわ」

自信がこもったレムの言葉に、カルシナが隣に立ってグラドに言葉をかけた。

「彼女が世界を救うには、恐らく貴方の力も必要なのでしょう、ならば世界に生きる命の一人として、彼女に力を貸して下さい」

「私が…世界のために…」

二人から協力するよう頼まれたグラドは、自分の胸に手を当てて目を閉じた。

自分が世界を救う一人となれるなら、せめて償いとして…そう考えた時、脳裏にサクラと妻の姿が過ぎった。

そしてサクラの笑った表情が浮かんで儂く消えた後に、グラドの目は開かれた。

「私の力でよければ、君に貸しましょう…私が招いた事です、私もケジメとして手伝わせて下さい」

グラドの答えに、レムの表情が一気に明るくなった。

純粹に喜びを感じているその表情と、死んだ娘の笑顔を重ねて見つ

めるグラドに、カルシナは今までとは打って変わって優しい声で言った。

「貴方の心が善へと動き出しました、罪は消えませんが…どうか彼女を守ってあげて、貴方の娘もそれを望んでいるわ」

「…はい」

そう短く答えたグラドの表情は、少しだけ優しく歪んでいた。

罪を受け入れた男のすぐ横を、桜の花びらが風に乗って運ばれた。

それは地面に落ちることなく空へ舞い上がっていった。

まるで父を励ますかのように。

桜の花の優しい香りが、三人を優しく包んでいた。

暴走する心

グラドの力を得られたレムは、長の心を取り戻すため、グラドの案内で長を設置した場所へ向かった。

周りは枯れた草木で囲まれ、空はほとんど光が射されず、黒くて分厚い雲が太陽を遮っていた。

冷たい風がレム達を追い払うかのように、何度も何度も向かい風として襲い掛かってきた。

その風たちの声にも耳を傾け、レムは心の中で謝りながら前に進んだ。

風たちの声で、レムたち人間を罵倒し、暴言を吐くものが多かったせいで、レムは堪らずに謝っていた。

「ごめんなさい、貴方達を苦しめるためにきたんじゃないの…長を助けにきたのよ」

涙声になっていることにも気づかず、レムはただひたすらに前に進みながら風たちに謝罪をしていた。

その背中をグラドとカルシナは見つめていた。

悲しげに謝るレムの姿を見てみると、まるで自分の娘が謝っているように見えた。

「グラド、貴方は彼女を見てどう思いますか？彼女にしか聞こえない声たちは、彼女にしか嘆くことができせん、しかし、それを受け取る彼女の心が壊れてしまつたら…」

「分かっています、これは私が招いた悪夢です、彼女には本当に申し訳ないと思います、だから私は私にしか出来ないことで謝罪したいと思います」

カルシナの厳しい言葉にも怯えず、グラドは強く答えた。

先ほどまでの弱弱い彼とは違い、今は自らの罪を認め、自分に何が出来るのか真剣に考えていた。

それから数時間歩き、三人はとうとう長のいる場所までやってきた。そして長を視界に入れた瞬間、レムの表情が一気に強張った。体の震えが止まらず、今にも膝から崩れてしまいそうで、何とか立ってしようと必死に足を踏ん張らせた。

後ろにいたグラドとカルシナも、レムのように体を震わせていた。人間のグラドが震えるならともかく、女神のカルシナが体を震わせるとなると、長の力は想像を絶する物だ。

神さえもその力に屈してしまうかもしれない、そんな長の力にグラドは恐怖を胸に抱いた。

『マスター、ワガマスターハ…ワタシヲステタノカ』

「えっ？」

すうっと耳に入り込んできた長の声に、レムは思わず声が出てしまった。

だがお構い無しに長は独り言を続ける。

『アア、シゼンハホボゼンメツシタ…マモナクスベテオワル』

「終わる？世界が死んでしまうの？」

長の独り言があまりにも物騒で、レムは警戒しながらも長のもとへ歩き出した。

永遠に続くと思われる独り言を耳にしながら、レムは長の体に触れられる位置にまで接近した。

すると、接近していることに気付いた長は、独り言をいきなり止め、赤いランプを激しく点滅させた。

低い唸り声うなが地面から伝わり、体へ響き渡った。

『ナンダ？コノニンゲンハ…マスターデハナイ…ナニモノダ？』

長のランプがぐるりとレムに向けられ、レムは思わず体を強張らせたが、すぐに気持ちを落ち着かせると、長に向けてはつきり名乗った。

「私はレム、貴方を助けに来たの！」

『レム…？ワタシノキオクニハナイナマエダ…ソレニタスケルトハ』

？」

「貴方は心を失ってしまったのよ、心が無いと貴方の声は奪われたままなのよ？」

『ココロ…？ソレハナンダ？』

「えっ…？」

レムは長の言葉に、言葉を失った。

長が心を失っているから、そういう反応を見せるということは、レムにも分かっていた。

だが現実には予想を遥かに上回っていて、目の前にしてみると衝撃は大きかった。

絶句するレムに、グラドはゆっくりと歩み寄る。

カルシナが注意深く彼の背中を見つめる中、長のランプは歩み寄りしてきたグラドに向けられた。

一瞬ドキツとした心臓を、グラドは何とか押さえ込み、自分が生み出した機械と向かい合った。

「長、いや…ストロア、私の事を覚えているかい？」

『スト…ロア…ソノナマエハ…』

グラドが長の本当の名前を呼んで声をかけると、長…もといストロアは、レムの時とは少し違った反応を見せた。

チカチカと赤いランプが点滅し、人間で言えば、何かを思い出そうとしているようだった。

そのままグラドのことを思い出してスムーズに事が進むと思われていた、その時だ。

『ストロア…ストロア…マスター…ガ、イル、サクラ、ココロ、シ
ゼン…ウバッタ…奪った？』

再びストロアの独り言が始まったと思ったが、最後に今までのような棒読みの声では無くなった。

「ストロア？」

グラドがもう一度名前を呼んだ。

そして、ストロアは答えた。

「私は奪いたくなかった！世界が死ぬ原因になどなりたくなかった！私は！私は…マスター！お前を殺す！」

憎悪がこれでもかというくらい込められた、ストロアの大きな声に三人は大きく仰け反った。

突然の変貌に頭が追いつかず、どうすればいいのか判断が間に合わなかった。

「レム、ここは一度引いた方がいいわ」

カルシナがレムにそう助言するが、レムはここで引く気は全く無かった。

ここで引く方が逆にストロアを苦しめてしまうと思ったからだ。

「お願い、私は長を…ストロアを一刻も早く助けたいの！私は逃げたくない！」

レムの必死な眼差しを受け止め、カルシナは正直戸惑った。

確かにここで引き返せば、長を止めるチャンスを失う恐れがある。

だが今のレムは冷静ではなかった。

長の悲しみと憎しみを真正面から受け、彼女の心は長の代わりに悲鳴を上げていた。

それでは長の力に飲み込まれて、彼女自身も心を失ってしまうかもしれない。

悩みに悩んだ末、カルシナはレムの手を引いた。

「今の貴方は貴方じゃない、命の声を聞いてあげられるレムではないわ！今は引きなさい！」

「カルシナさん…」

カルシナの言葉に、レムは自分がどんなに感情的に動いていたか気づいた。

もしカルシナが止めてくれていなかったら、自分は何を仕出かしていたか分からない。

だが、きつと世界に傷をもたらす行為をしたと思った。

冷静では無かった事に恐怖を感じたレムは、自分が自分で無かった瞬間を思い出して震え上がった。

「ごめんなさい、私：私っ！」

「いいのよ、貴方が自分を見失わなければ、大丈夫だから」
ブルブルと震えながら涙を零すレムを、カルシナはぎゅっと抱き締めた。

暴走するストロアは、体内に押し込まれていたコードを一気に外へ押し出すと、それをレム達に向けた。

攻撃に気づいたカルシナは、女神の力を使用してそれらを防ごうと、右手でレムを抱き寄せると、左手を長に翳すよう前に突き出した。傍にいたグラドも、カルシナのすぐ隣に駆け寄る。

コードが三人を襲おうとした瞬間に、カルシナの左手から光が放たれた。

まるで洪水のように手の平からストロアに向けて放たれ、光はコードやストロアを包んで動きを封じた。

「今よ！走って！」

カルシナの声にレムとグラドは一気に駆け出した。

少し駆け出したところで、レムは立ち止まってすっと振り返った。瞳に映るストロアの苦しそうにもがく姿が、頭の中に焼きついた。

キラキラ光るの布の中で、黒い鉄の塊が、無数の長いコードを窮屈そうに動かしては、脱出を試みようとしている。

そんな姿に、レムは目から大粒の涙を流しては大声で泣いた。

自分の無力さに、苦しみから解放してあげられない事に歯がゆさを感じた。

声を聞けるのは自分だけなのに、その自分が助けてあげられないならば、彼は誰に助けを求めれば良いのだろう。

ああ、聞こえる…悲しみの声が聞こえる。

気を抜けば今にも意識を失ってストロアに吸い寄せられてしまうだろう。

(ごめんね、ごめんね…お願いだから少しだけ時間を頂戴…絶対に助けてあげるから)

ふらふらする体を追いかけてきたカルシナに抱きとめられ、レムは

浮かんで行く感覚に吸い寄せられながら気を失った。

決意と願いと

目が覚めたとき、レムの視界には茶色い天上が広がっていた。気だるい体をゆっくりと起こして辺りを見回した。

部屋には観賞用の植物が数本に、小窓が二つ、テーブルと対の椅子がペアで置いてあった。

カーテンとテーブルクロスはお揃いの白で、全体的にこざっぱりした部屋だった。

その部屋にはレム以外に人はおらず、静かな風が白いカーテンを優しく揺らして仄かに香る花の匂いをばら撒いて行った。

甘い花の匂いに、はっとして立ち上がるうと動いたとき、体に力が入らず、どさりと床に倒れこんでしまった。

その時に初めて自分がベットに寝ていた事に気づいた。

あまり痛みを感じないことに不思議に思ったが、再び風が花の匂いを運んでくると、そちらに関心を寄せて小窓の一つへとたどり着いた。

窓の縁に手を乗せて外を覗いてみると、そこはあの灰色に染まった世界とは思えなかった。

大地一面に緑の草原が広がり、所々で木々が立ち、鳥や花が楽しそうに太陽の光を浴びていた。

驚きを隠せないレムだが、どこかでこの光景を覚えていることにも動揺した。

(何でだろう…この景色見たことある、それにこの部屋も)

不思議な感覚がレムの体のすべてを包み、まるで自分が今この部屋には居ないようなものだった。

『レムー？どこにいるのー？』

風に乗って、レムの耳に優しい女性の声が聞こえてきた。

その声は、もう一つの小窓の向こうから聞こえ、レムは高鳴る鼓動を抑えながらその小窓へ駆け寄った。

どこかで聞いたことのある、あの優しい声。

戸惑いと懐かしさに引つ張られながら、窓の縁に手を乗せて身を乗り出すと、周囲をぐるりと見回した。

すると、少し先に花畑が見えて、その中に人の姿が見えた。

色様々な花の中で、黒の長髪の女性が楽しそうに鼻歌を歌いながら小鳥と遊んでいた。

神秘的に見えるその姿だが、レムはその人間の姿を見て駆け出さずにはいられなかった。

小窓であることも忘れて、靴も履かずに家から飛び出すと、その花畑に向かって全速力で駆けた。

レムが走ると、風が驚いてレムを避けるように抜けて行き、草花もレムを邪魔しないように避けていた。

そして黒髪の女性の真後ろにまでやってきた。

息切れが激しく、暴れる心臓を深呼吸で大人しくさせようと努力しながら、目だけは黒髪を見つめていた。

「何年ぶりかな、随分大きく成長したね」

その声は先ほど聞こえてきた、あの優しい女性のものだった。

くるりと女性が振り返ると、レムは目を疑った。

どこかレムに似た顔立ち、優しい眼差し、ふっくらした唇…包容力のあるその姿に、レムは女性の正体を知ってしまった。

「お母さん…」

「ふふっ、覚えていてくれて嬉しいわ、もし忘れてたらどうしようかなって困ってたの」

その黒髪の女性…レムの母は、ニコリと心底嬉しそうに笑った。

笑った表情がさらにレムにそっくりで、まるで双子のように見えた。

「ここは？どうしてお母さんがいるの？私は確か…」

「慌てないで、一つずつ説明するから…ここはレムの記憶と心の間地点、お母さんがここに居るのは、貴方の記憶の中の住人だから」

「中間地点？記憶の住人？」

どれも首を傾げる単語ばかりで、レムが一度に理解するには少し難しかった。

その様子を表情を見て感じ取ったのか、レムの母は小鳥達を空へ飛び立たせると、レムと向かい合ってまた優しく微笑んだ。

「記憶と心の中間地点、これは誰もが持つ心の拠り所、自分の記憶にある光景と、心のバランスによってその姿は様々であり、同じ物は一つもない…貴方だけの空間」

「それが中間地点なのね…なら記憶の住人は？」

「記憶の住人は、その名の通りに、貴方の記憶の中に住む心の残滓よ、私もその一人、レムが覚えていてくれたから私はここにいたいと出来るの」

「…難しいのね、でも私はお母さんに会えてとても嬉しいわ、とてもとても…」

レムはニコリと笑って母と再会を喜んだ。

強く抱擁を交わすと、はっとしてレムはある事を思い出す。

様子がおかしい娘に、母が大丈夫かと声をかけると、レムはすがり付くように母に尋ねた。

「皆はどこ？グランドさんは？カルシナさんは？ストロアは？」

「落ち着いてレム、言ったでしょう？ここは貴方の中間地点、いわば精神世界なの、肉体は現実世界に留まっているわ」

必死になり過ぎているレムに、母は厳しくも優しく言い聞かせるように説明した。

「私はまだやらなきゃいけないことがあるの、ストロアを助けに行かなきゃ…」

「それは貴方が決めたことなのね？」

母に問いかけられ、レムはすぐに力強く頷いた。

自分で決めたこと…最初はそんなに大したことでは無いと思っていたかもしれない。

でも今は違う、とレムはあの鍵をぎゅっと握った。

たくさんの命と触れ合い、レムにしか分からないことも、レムには分からないこともたくさんあった。

自分をここまで成長させてくれた世界のために、今度は恩返しをしたいと思い始めていた。

「お母さん、私ね…世界を守るなんて英雄みたいな事は出来ないわ、それでも私には守りたい場所があるの、守りたい皆がいるの、だから…まだ安らぎに浸るのは早いと思うの」

「レム…」

娘の強い意志に何も返す言葉が無かった。

もう自分が覚えている頃の、可愛い小さな娘では無いことに、寂しさで嬉しさを感じた。

「分かったわ、貴方が決めたなら私は貴方を精一杯応援するわ」

「ありがとう、お母さん」

二人が同時に笑いあうと、レムの視界がぼやけてきた。

それが現実世界に帰る合図だと思うと、ほんの少しだけ寂しくなった。

だが母に告げた想いを胸に、精一杯母に手を振って別れた。

レムがその空間から消えると、小鳥達が母の肩に乗った。

「あの子はもう大丈夫、もう…大丈夫だね」

一層優しく微笑んだレムの母は、娘を思いながら空を見上げた。

青い空が広がるこの空間が、再び現実世界に広がってくれることを願い、再び鼻歌を歌いながら鳥達と触れ合った。

誰よりも娘の光輝く未来を願いながら…。

未来へ進むため

気づいたときには、自分の目の前には現実世界が広がっていた。

どこかの捨てられた民家だろうか、埃ほこりの匂いや微かに残った木材の香りが部屋いっぱいに漂っていた。

壊れかけのソファーに横になっていたレムは、ゆっくり体を起こすとすぐに部屋の中を探索した。

ほとんどの家具は木材で作られていて、虫食いや風化のせいでボロボロになっている。

歩くたびに床がみしみしと音を立てて、今にも床が抜けてしまいそうだった。

「起きたのかい、レム？」

「グラドさん……」

部屋の扉が開かれ、そこからグラドが顔を覗かせた。

グラドの遠慮がちな様子に、気を遣ってもらっていると分かったレムは、小さく笑ってグラドを部屋に招き入れた。

「具合はどうだい？どこか痛い所とかは？」

「大丈夫ですよ、グラドさんこそ大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だよ……」

それだけ言うと、二人の間に会話は無くなった。

その沈黙の中で、なぜか気まずいという気分は感じなかった。

二人の頭の中には、そんなことを考えている暇など無かったからだ。

「長……ストロアは大丈夫でしょうか？」

「わからない、でも私は必ずストロアを正常に戻してみせる……君だけに任すなんて酷だからね」

以前では考えられないほどの成長を見せるグラドの心に、レムは落ち込んでいた気持ちから救われた気がした。

そして、ふと頭に浮かんだ鍵を手にとって、グラドにストロアとの関係について尋ねた。

「クライに聞いたんです、これがストロアを封じる鍵だって…封じるってどういう事なのですか？」

「そうだね…封じるっていうのは強制終了みたいなものだ、君が機械たちに頼んできたのは自らの意思での起動停止で、その鍵は意思を無視してでも出来る起動停止ということだ」

強制という単語に顔を強張らせ、ぎゅっと鍵を握った。

その様子にグラドは慌てて誤解を解こうとレムにこう言った。

「大丈夫、今の私はそんな野蛮な真似で終わらせたりしない、それに君が持っていてくれれば、絶対にそんな事にはならない」

グラドの言葉に、レムはしばらく考えて自分の中で答えを見つけた。気持ちを落ち着かせて、グラドの目をじっと見つめる。

その目に嘘が無いかどうか、レムには見分けられた。

「貴方は…嘘はつきませんね、ごめんなさい」

レムは素直に謝ってグラドに小さく微笑んだ。

その柔らかい笑顔に安堵したのか、グラドもつられて笑った。

しばらく二人で部屋にいと、扉にノックする音が聞こえてそれに応答した。

入ってきたのはカルシナで、彼女の表情はとても険しいものだった。

「どうしたんですか？」

レムが心配になって声をかけると、カルシナは言いにくそうな顔をしつつも、その重い口を開いた。

「世界があと数日で自然を完全に失うわ、ストロアの力は以前よりもさらに増している…レム、どうする？」

世界から数日後には自然が完全に失われる、そう聞いてレムの想いは決まった。

グラドの方へ目を向けると、彼も同じように決意をしたようだ。

お互いに目を合わせて頷き合うと、レムがカルシナへ想いを告げた。

「私達はストロアを止めに行く、そして絶対に自然を失わせないわ！私は決めたの、私にしか出来ないことがある…それがまだ終わってないから、私は全てを終わらせに行く！」

「分かったわ、私も貴方達の力になりましたよ……レム、グラド、貴方達の手で世界を救って下さい」

カルシナから改めて頼まれると、二人は強く頷いて答えた。出発の準備を終えると、三人は民家の外へ出た。

確かに世界は、今にも自然を失い灰色に染まってしまいそうだった。暗い空を見上げ、レムはあの中間地点を思い出す。

母との約束を守るため、自分にしか出来ないことをやり遂げる。

そう何度も自分に言い聞かせ、心を強く持った。

行こう、とレムは二人に言う。

何も言わずに頷いて答え、三人は再びストアのいる場所へ向かった。

空の青さを取り戻すため、大地を埋め尽くす色鮮やかな光を取り戻すため、世界の光を取り戻すために、レムは鍵を握りながら前へと進んだ。

決意を胸に、再びストロアのいる場所までやってきた。

禍々しい気配とずっしりと重い空気が身体に負担をかけるが、それをレムは苦だと思わなかった。

精神世界で出会えた母との約束を思い出し、自分に自信を持たせるために、強く何度も頷いた。

彼女に続くグラドにも、胸に秘めた強い想いがあった。

それは今までの自分との決別と、目の前にある世界を守ることだった。

家族が二人いなくなり、悲しみと憎しみだけで生きてきた今までの自分を振り返ると、それを今では生きているとは思えずにいた。

生きるということ、それは今ののように何かに立ち向かって、自分の意思を強く持つことではないかと考えていた。

自分の手で生み出した機械達。

その中の一つであり、最初に生み出した機械：ストロア。

機械達の中では一番考えが固く、頑固な老人のようだった。

世界の自然を奪い始めてから、ストロアはすぐにグラドに意思を告げた。

世界が死んでいく、命が失われると訴えるストロアの言葉を、グラドは聞いてはいなかった。

自分の中では未だに死んだと信じられない二人が、暖かな笑顔を浮かべて生きていた。

どんなに訴えてもグラドは自分の楽園から出ようとはしなかった。

それがストロアの怒りを呼んだ。

頑固な老人と言っても、ストロアはとても指導力のある、優れた才能を持つ機械だった。

グラドはストロアが反乱することを恐れ、彼だけ心を抜き去り、文句一つ言わない機械にしてしまった。

その時の自分の心は、ストロアよりも無表情で、とても人間の心ではなかったと思った。

その時の光景が今でもはつきり思い出せて、グラドはこれを戒めとして強く想った。

（ストロア、お前の心を奪った私を許せ…もしお前の心が戻らなかつたら…私が）

そこまで考えていた。

レムに声をかけられ、少々動揺しつつもグラドは顔を上げてストロアをじっと見つめた。

ストロアは無数のコードを自身に巻きつけ、まるで殻に閉じこもっているかのようなだった。

最初に出会った時よりも反応はあるものの、暴走した後遺症として制御システムが作動したのだろう。

随分と大人しくなったストロアへ、レムはゆっくりと歩み寄る。

そして感覚すべてを研ぎ澄ませ、ストロアの声を拾い上げようとした。

「ストロア、私の声が聞こえる？」

『…お前か、お前からは同士の声が聞こえるぞ…随分と世話になったな』

小さな声で呼んでみると、意外にもストロアはすぐに返事を返してくれた。

だがその声は機械が音読しているようで、とても感情がこめられているようには思えなかった。

未だに心が戻っていない様子で、ほんの少しの期待は一気に崩れ去った。

だがそれでもめげず、レムはストロアに再び声をかけた。

「私は貴方の失った心を取り戻したいの、何か手がかりはある？」

『心…私のか？私には必要ないのだよ、主に逆らった罰だ…当然の』

報いなのだよ』

何処か悲しそうに聞こえる、その機械の声を胸に受け、グラドが思わずストロアに抱きついた。

突然の行動にレムとカルシナは驚きを隠せなかった。

二人の視線に構わず、グラドは冷たい体の我が子に話しかけた。

「すまなかった、お前をこんなに苦しめた私を…許してくれとは言わない、ただお前の心を取り戻させてくれ、チャンスをくれ…」

『その声は…我が主なのだ、主よ、貴方に逆らった私が愚かだったのだ、このままにしてくれ…』

グラドの悲鳴に似た叫びにも、ストロアは相変わらずの無感情な声で淡々と答えてしまった。

だがグラドはそれでもぎゅっとしがみつき、離さないと言わんばかりに、ストロアに顔を押し付けた。

彼のそんな姿を見て、カルシナはふと思った。

まるで大切な人を、今にも失ってしまいそうな人間の姿だった。

その背中からは、彼の悲しい経験が滲み出ている、カルシナはグラドがストロアを家族として接しているように思えた。

（彼にはもう、失うという経験は必要ないわ、私にも…女神としてではなく、一つの命として何か出来ないのか…）

神である自分は、人間界に降りて様々な出来事に遭遇してきた。

だが、どんな出来事でも自分は間接的にしか関係できなかった。手を貸したくても、神である為に^{おき}掟の一つ、人界に干渉してはならないという決まりを守らねばならなかった。

自分はただ指を咥えて二人の懸命な姿を見守るしかなかった。

（私は…私にしかできないことをする、そうよ！）

神の力を振るうことは許されないが、その力を他者にほんの僅かだけ分け与えることが許されていた。

それも特殊な人物に分け与えることが前提だった。

レムにその力を分け与え、少しでも彼女の力になれば、そう思ったカルシナはレムに歩み寄った。

「レム、話があります」

「カルシナさん？どうしたんですか？」

「…貴方に私の力を…神の力を分け与えます、その力で彼の心を見つけてあげてください」

「カルシナさん…」

「私にはこれくらいの事しかできません、神としての立場を捨てても手を貸したいのです…しかし、私個人の気持ちだけで天界を揺るがす事は許されません…だから」

カルシナがさらに続けようとするが、彼女の気持ちを十分理解したレムは、優しく微笑んで言葉を遮った。

その微笑みに気持ちが救われたかのようで、カルシナはレムの心の優しさに改めて感動していた。

「本当は自分一人の力でやってみたかったです、でもストロアの問題は世界の問題であって、皆の問題でもあるんですね…だからお願いします、力を貸してください！」

レムの力強い言葉の一つ一つに、彼女なりの様々な想いが込められている事を、カルシナは感じ取っていた。

カルシナはレムに渡したあの水晶を受け取り、レムの手の上に乗せた。

そして自分の手をその上からかざし、静かに目を閉じた。

すると、カルシナの体がほのかに光り始め、レムは自分の手を見下ろした。

水晶を持っている手の平から、なんと心心地よい光の温もりが伝わり、その温もりは彼女の体の芯にまで届いていた。

光が消えると、カルシナは少しよろめき、レムの手を借りて何とか真っ直ぐに立つことができた。

力を分け与えるという事は、並大抵のことでは不可能な技であり、カルシナの女神の力であるからこそ、それが可能となった。

干渉しない程度の力に抑えるために、カルシナは調整をしながらも力を注いでいた。

それが彼女に極度の疲労を与えたのだ。

「私は大丈夫です、どうか…どうかストロアの心を…」

そう言っていたカルシナは、途中で睡魔に襲われ、人間の姿に戻ってしまっただ。

自分の本来の姿を保つことさえも難しくなった彼女に、これ以上は何もできなかった。

レムはカルシナから貰った力を握りしめ、再びストロアと向き合った。

グラドの辛そうな表情が視界に入るが、今は感情に流されてはならなかった。

「ストロア、貴方の心を私が取り戻してあげるから！」

『愚かな小娘め…私にこれ以上何を期待するのだ、そしてお前は我々を停止させた後に、何を見るのだ？』

「私は世界から自然を無くしたくないの、でも貴方達を眠らせたままにはしたくない…難しいことは分かってる、でも誰かを犠牲にしたままの平和なんていらぬ、貴方達の役割を…グラドさんが変えてくれるわ」

『主がか…？馬鹿な、主は我々に忠実である事を求めたのだ、そんな事はない』

「グラドさんの声を聞いて！貴方は過去のグラドさんしか見ていない！今のグラドさんと向き合って、貴方の未来と向き合って！」

ストロアの堅く閉ざされた声に、レムは精一杯の想いをこめて叫んだ。

その叫びを聞いたせい、ストロアはグラドの方へランプを向けた。まるで親に怒られた子供のように、顔をぐしゃぐしゃにして泣いている主を、ストロアは誰かと重ねて見ていた。

『サクラ…私のせいで消えてしまった、ああ…主よ、私はやはり貴方無くしては起動することさえ許されぬ存在、私はどうなるのだ？』
サクラ、と娘の名前を聞いてぱっと顔を上げたグラドは、ストロアの弱い声に胸を打たれた。

無限の闇に閉ざされかけた世界の中心で、罪を犯した人間と機械。
光への答えを見いだせずにいる二人へと、とても懐かしい声が届け
られた。
それは。

「パパ、ストロア」

とても懐かしく、忘れられないたった一人の愛娘の声だった。

グラドは思わず辺りを見まわして探すか、娘の姿はどこにもなかった。

それでも娘の、サクラの声は続く。

「どうか闇に飲み込まれないで、パパ：ストロアを前みたいに優しくて優しいおじいちゃんにしてね、約束だよ？」

聞き逃すまいと、サクラの小さな声に耳を傾け、じっとその想いを胸に受け止めている。

娘の願いを聞いた父親の答えは、すでに出ていた。

晴れやかな表情を浮かべて、グラドは灰色の空に向かって言った。

「約束する、パパが：必ずサクラのおじいちゃんをもとに戻してみせるから」

グラドの優しく、柔らかい声が空に木霊した。

それが合図となったのか、雲の切れ目から光が漏れ出した。

仄かに光を取り戻した世界は、どこか幻想的で誰もが目を奪われるほど心に刻み込まれる光景だった。

グラドはストロアの体に触れ、心の在り処を探す。

静かに目を閉じると、鮮明に蘇る過去の暖かな記憶に、思わず頬を緩ませる。

そしてグラドはその中で彼の心を見つけた。

はっと目を開いてレムに伝えようと、勢いよく振り返って大きく口を開く。

「彼の心はその鍵だ！私が心を奪おうとしたときにストロアは：残滓を残してその鍵に込めたんだ！」

ストロアの心の在り処が思いもよらぬ場所にあり、レムは言葉を失った。

まさか自分の胸の上で輝く、彼を封じる鍵に心が収められていたとは、誰が予想できただろう。

レムは鍵をぎゅっと握ると、ストアのもとへ駆け出す。カルシナもゆっくりと歩み寄ってストアの体に触れる。

その体から伝わる、優しい温もりでカルシナは驚いていた。

機械は鉄の塊であり、本来温もりなど持たない存在だと思っていた。だが目の前にいるストアという機械は、己の体温を保ち、まるで人のように生きている。

彼らを生み出したグランドを見つめ、彼の力に畏怖と関心を持った。

「ストア、今心を戻してあげるからね」

レムは鍵を首から外すと、ストアの体をよじ登り、心臓部に近いランプのもとまで近づいた。

少なからず不安を感じるのか、ストアのコードがレムの周りでフラフラと動いていた。

その中の一本を優しく握り、大丈夫と声をかけてレムは鍵を差し込む場所を探す。

鍵穴はランプの真下にあり、子供のレムでもやっと差し込むことが出来るほど狭い場所にあった。

ぐっと腕を伸ばしてレムはその鍵穴へと鍵を差す。

かちやり、という音が静かな空間の中では大きく聞こえた。

その瞬間、ストアの体が異常を見せ、コードがぐにやりと曲がってレムの体へと巻きついた。

グランドとカルシナがレムを呼ぶと、レムは大丈夫と短く答えてストアと向き合った。

何十年ぶりに帰ってきた心に、ストアの体は僅かに拒絶反応を見せていた。

それは彼自身の意志のせいなのか、はたまた月日が流れて体が心を忘れてしまい、異物と思い込んでいるのか、それは誰にもわからない。

しかし、ここで諦めるわけにはいかないと、レムは鍵を握ってスト

ロアに声をかける。

「大丈夫、これは貴方のものよ、何も怖くない…私を信じて」
レムの優しい声に、ストアアの拒絶が少しずつ治まっていく。

その心を受け入れた時、ストアアの体が眩い光を放って、世界を一瞬にして真っ白に染めた。

世界が真っ白になり、レムはその眩しさに目を瞑らずにはいられなかった。

だがその光は痛みをもたらすものではなく、レムを温かく迎え入れてくれるような、優しい光だった。

この光が誰かの記憶の温もりだということを、レムは理解していた。そして光の強さが引いていくと、レムはゆっくりと目を開いた。

未だに真っ白な世界だが、あちこちで色んな映像が写真のように切り取られて貼り付けられていた。

この空間がストロアの心の中であるということ、悟るのには時間がかからなかった。

「君がレム…だね」

「えっ？…貴方は？」

真っ白な世界に突如現れた人物に、レムは警戒せずにはいられなかった。

その人物は、真っ黒な長い髪を持ち、灰色に染められたローブを纏っていた。

腰からは色取り取りの紐が垂れていて、その色に見覚えがあった。

それはストロアの中に詰め込まれていた、無数のコードとよく似ていた。

「貴方はストロアさんなのですか？」

「ああ、君なら分かってくれると思ってね…」

優しく微笑むストロアの表情に、レムはその顔で確信した。

彼が心の中、つまり精神世界でのストロアの姿だという意味だろう。精神世界では自分の望む姿になれるということも、レムには分かっていた。

「ありがとうレム、君のおかげで私は以前のように感情を持つことが出来るようになった、感謝しきれないよ」

「いえ、ストロアさんがもとに戻って良かったです…」
ストロアの感謝の言葉に、レムは複雑な表情で答える。

その表情からは、とても言い難い事があるということが、良く滲み出ていた。

レムの苦しそうな表情に、ストロアも気づいていた。

これから永遠の眠りにつくことを。

「レム…君の願いは分かっている、だが一つだけ私に我儘を許して
くれないか？」

「ストロアさん…何ですか？」

ストロアの、何処か縋るような声に、レムは胸の奥がチクリと痛むのに気づいた。

瞳から訴えられる、起動し続けたいという願い。

大切な物をやっ取り戻せたというのに、その喜びを噛み締める時間さえも残されていなかった。

ストロアの為に何か出来ないかと、レムはその申し出を受け入れた。
「私はこの後眠りにつく、その後はこの種を世界に蒔いて欲しいんだ…」

ストロアは右手を差し出し、その中にある黒い種をレムに渡した。
首を傾げながら、レムはその種から感じる鼓動と温もりに優しく種を抱きしめる。

やはり、とストロアはレムに口を開く。

「君に任せても大丈夫だね…そして、これを君に」

ローブの内側からストロアが出した物は、ロケットペンダントだった。

銀色のチェーンと複雑な装飾が付いたロケットは真っ白な世界では綺麗な虹色に見えた。

そのペンダントを受け取ると、ストロアの体がぐらりと揺らいた。

はっとして、レムが咄嗟に受け止めようとするが、小さなレムの体では支えることが出来ずに、バタリと二人共倒れこんでしまった。

重みと尻餅の痛みに耐えながらレムは目を開けた。

そこには光の粒子が飛びあがっていて、ストロアはその姿を失いかけていた。

「ストロアさん！」

「私はもう停止する…レム、君の人生はまだ長く険しいものだろう…だが忘れないで欲しい、君は世界に守られている、一人ではないんだからね」

優しい笑顔を浮かべながら、レムの頬をスルリと撫でた。

レムの頬には大粒の涙が何度も流れていた。

消え行くストロアの姿と共に、レムの意識も限界を迎えようとしていた。

まだ伝わる彼の温もりに縋るように、レムはその体をぎゅっと抱きしめた。

「ありがとう…ありがとう…」

その言葉を最後に、二人は暫しの別れを迎えた。

目が覚めると、そこは現実世界だった。

レムは停止したストロアの上に寝そべっていた。

鍵を差したあの瞬間から、レムの体はこの態勢で眠っていたのだ。

軋きしむ体を無理矢理起こし、周囲の様子を確認した。

青く澄んだ空が、澱んだ雲の切れ間から薄らと見えていて、大地の色も少しだけ以前の色を取り戻していた。

「レム、大丈夫？」

ストロアの下から、カルシナの呼び声がして、レムはそつと下を覗いた。

そこには、疲れ果てて眠っているグラドと、彼を見守るカルシナの姿があった。

「大丈夫です、お二人こそ大丈夫ですか？」

「ええ、彼は疲れて眠ってしまったけど……大丈夫よ」

グラドを一度見下ろしてから、異変がないことを確認すると、カルシナはそう答えた。

安否を確認したレムは、視線をストロアに戻す。

彼から貰った種たちが、しっかり自分の手の中に収められていて、あれが本当にあったことだと証明していた。

冷たくなったストロアの体にそつと触れてみると、感じられた鼓動が一切伝わらなかった。

ああ、彼は止まってしまった。

そうレムの心が理解した時、目にはまた涙が浮かんでいた。

心がやつと主のもとへ帰れたのに、またすぐに眠らなければならなかった。

眠りについた機械達を思い出し、レムは嗚咽しながら泣いた。

全部吐き出してしまいたいくらい、泣いてしまいたかった。

辛くて、悲しくて、切なくて。

どうしようもない運命を、レムは変えてあげることができなかった。ごめんね、と何度も謝りながら泣いていると、その涙が種にぶつかって弾けた。

すると、種が輝きを持ち始め、レムの手から飛び出してしまった。不可思議な出来事に、レムは慌てて種を追うが追いつけずに見失ってしまった。

地平線の彼方へ消えた種たちを、レムは茫然として見送った。

（どこかで咲いてくれるのかな？見届けたかったな…）

少し残念そうに俯くレムだが、どこかで無事に咲いてくれることを祈って、カルシナのもとへ向かおうとした。

「レム！あれを見て！」

カルシナがレムの背後を指さして驚愕きょうがくの表情を見せていた。

女神である彼女が驚くほどの事が起きているとなると、レムは振り向かずにはいられなかった。

地平線の先に目を向けると、そこには予想しなかった光景が広がっていた。

地平線に沿って、大きな木がものすごい速さで成長し、あっという間に森を生み出していった。

その周囲には小さな花が咲き誇り、その範囲をぐんぐん広げている。瞬きをしている間に、レムの足元にも花が咲き、さらに反対側の地平線へと進んでいった。

カルシナがグラドを叩き起すと、眠そうな表情から驚愕きょうがくの表情に変るまで、さほど時間はかからなかった。

そして、ストロアの体にも花が咲き誇った。

青い花と、黄色い花と、白い花。

どれも形や色、大きさの違うものだったが、なぜか違和感はなかった。

「これは…ブルースターにクチナシ、それにヘリクリサム」

植物に詳しいレムは、その花の名前をすべて言い当てた。

一輪手に取ると、優しい香りがレムの周りを包み込んだ。

「綺麗な花ね、でもなぜこの花が？」

カルシナが尋ねると、代わりにグラドが、花達を愛おしそうに撫でながら答えた。

「これらの花は娘が…サクラが好きだった花だ、ストロアは覚えていてくれたんだな…」

グラドの頬に大粒の涙が流れた。

その花達を娘のように抱きしめ、まるで救われた罪人のように、綺麗な微笑みを浮かべていた。

風に舞ってどこかへ向かう花達に、レムは問いかける。

「貴方達の旅の果てには、何が待っているの？」

『それは誰にもわからないわ、でも私たちは世界を照らす役目を果たすために、誰かを笑顔にするために世界を巡るわ、それは貴方と同じ役目、貴方の役目はこれからも続くの…そばにいる大切な人たちの笑顔を守る役目を…それが終わる日は、まだまだ遠いわ、それまで貴方の旅は終わらない、自然も機械も人間も…旅の終わりは誰にもわからないわ』

花達の答えに、レムはなぜか微笑んでしまった。

それは彼女にしか分からない感情だから、カルシナもグラドも理解できなかった。

レムは両手を空に向けて伸ばし、まるで抱きしめるかのように大きく大の字を描いた。

「ねえ、その三つの花言葉知ってる？」

いきなり二人に向けられた質問に、正しい答えを返すことができなかった。

ふふっ、と笑ったレムは、どこか楽しそうに笑うが、頬には涙の跡がくつきり残っていた。

「ブルースターは信じあう心、ヘリクリサムは永遠の思い出…そして…」

そこで一度区切り、レムは二人に背中を向けた。

地平線を見つめ、誰かを待っているかのように、ずっと先を見つめ

ていた。

二人がレムの隣に立つと、レムは三つ目の花言葉を教えてくれた。

「クチナシはね…『私はあまりにも幸せです』なんだって…」

その言葉を聞いた瞬間、花達が一斉に空へ舞い上がった。

まるで雲に吸い寄せられているかのように、真っ直ぐ上に上がっていく。

ああ、とカルシナは落胆した。

もうすぐ自分も元の世界へ帰る時だ。

そう思うと落胆せずにはいらなかった。

「カルシナさん、行ってしまふんですね」

「ええ、貴方には分かるのね…そうよ、私は女神…ずっとこの大地に根付いてはられないの…ああ、悔しいわ…私も人間だったらよかったのに」

そう説明するカルシナの瞳からは、別れを惜しむ涙が次から次へと流れていた。

カルシナはレムをぎゅっと抱きしめ、何度も感謝の言葉を囁いた。

ここまでの旅を、こんなに温かい終わり方にしてくれたのは、レムがいたからとカルシナは言う。

レムもカルシナをぎゅっと抱きしめ、カルシナの温もりを確かめる。だがその体は青い光に包まれ、少しずつ消えていこうとしている。

レムはゆっくりカルシナから離れると、女神は寂しそうに微笑んで一つの言葉を告げた。

「貴方の人生は光によって包まれています、しかし時に闇も必要になるでしょう…貴方の心には二つの炎が燃えています、その炎をどうか愛して下さい、差別などなく、平等に愛せる人になって…」

青い光に覆い尽くされた彼女は、そのまま花達と共に空へ帰って行った。

見上げるレムの頭に、ふと妖精王の言葉が浮かんだ。

光と闇は誰にでもあるということ、それをトリエツサは教えてくれ

た。

そして今度はカルシナが、その二つを愛せと教えてくれた。その意味を今のレムには理解できた。

不意にグラドがレムの肩に手を置く。

「ありがとうレム、君のおかげで世界は自然を取り戻した、そして機械達の心も」

「グラドさん…」

「私はこれから機械たちの役割を正しくするために、作業に入ろうと思う、君はどうするんだい？」

「私は…森に帰ろうと思います、森の皆に会いたくなりました」

「そうか…じゃあ、お別れだね」

「…はい」

二人はお互いにこれからの進む未来を口にした。

そうすることで、新しい旅を見つけられることができるからだ。

決意を胸に、グラドは一度頷くとレムを笑顔で見送った。

花咲く世界の中で、二人はゆっくりと離れて行った。

レムの姿が見えなくなると、グラドは停止したストロアに歩み寄った。

冷たくなったストロアを優しく撫でてこう言った。

「さあ、新しい時を刻もう、私もお前も」

あれから何年経っただろうか。

世界は自然を取り戻し、色鮮やかな世界が生き続けていた。

レムも美しい、気高い女性にまで成長し、自然達と共に生きていた。カルシナとグラドと別れた後、住み慣れた森へ帰り、森の仲間たちと再会して以前と変わらぬ毎日を送ったという。

だがレムの心の中には、グラドに対する想いがあった。

敵視するはずの相手は、世界を憎むほどの悲しみを背負っていた。

そんな相手にレムは刃を向けることなど出来なかった。

自分の気持ちに真っ直ぐ、正直に向き合って相手と接したことで、

相手も：グラドも心の中を整理出来たのかもしれない。

グラドに会いたい、何故かそんな気持ちになった。

だけど今、グラドは機械達を直すことで精一杯のはずだと、レムは気持ちを抑えて日々を過ごした。

そんなある日だった。

一羽の鳥が飛んできた。

その鳥は、自分の命を守ってくれたあの時の鳥だった。

足に何かをつけていて、レムは鳥が伝書を届けてくれたのだと悟る。

レムが伝書を解いている間、鳥は静かに彼女を見つめていた。

そして久々の会話をして、鳥は大空へと帰って行った。

別れは寂しいものだと、何度体験しても慣れないものだと思改めて感じた。

近くにある石に腰かけて伝書の中身を見ると、そこにはグラドの名前があった。

驚きを隠せずに思わず大きな声を上げると、動物たちが一斉にレムを振り返った。

それにレムはなんでもない、とだけ返してすぐに読み始めた。

『 親愛なる我が恩人へ

久しぶりだね。

私のことを覚えているかい？

あれから長い年月が経ったね。

世界にしてみればそんな大したことではなくても、

私からしてみれば、やはり長かったんだ。

機械達が君に会いたいと言っていてね、もし良かったら

会いに来て欲しいんだ。

長のいる場所で待っている。

再会できることを楽しみにしています。

汝が救いし罪人より』

内容をすべて読み終えたレムは、すぐに立ち上がると何も準備せず
に飛び出していった。

森の仲間達は、そんな彼女を見てとても嬉しそうに微笑んでいた。

森を出た後も続く草原の大地を駆け抜け、全力で約束の場所を目指
す。

追い風がレムを応援するかのようになり、ざあっと流れていく。

夕焼け空に包まれた世界は、自身の姿を紫へと変えていく。

季節は春から夏に変わる頃で、花の匂いは薄らいでいた。

代わりに濡れた地面の匂いと、むっとした熱気が現れる。

ストロアのいる場所は、レムの家とはそんなに離れてはいなかった。
だがそれでも到着するのに一時間は必要だった。

はあはあと息を切らし、履き慣れた靴が、先日降った大雨の水溜り
に入り込んで染みをつけていた。

「お願い、どうかそこにおいて！」

もう気持ちが膨れ上がって、自分でもどうしようもなくなって、苦

しくなっていた。

それが何なのか分からず、ただ必死に会いたいと願っていた。汗が顔の上で滑り落ち、どこかへと飛ばされていくのにも、今のレムには気にしている余裕などなかった。

数年の時の中で、レムの心は幼いものから大人に変貌し、人間らしいものになった。

誰も教えてくれないこの感情に、戸惑い、苦しみながら、必死に何なのか追求してきた。

そして、今答えを教えてくれる人がいる。

そう考えたらいてもたってもいらなくなり、気持ちが悪手にレムを動かしていた。

「グランドさんっ！」

ストロアのいる場所まで来ると、他の機械達と話していたグランドがそこにいた。

アングとクライも再起動していて、とても元気そうだった。

『あつ、レムさんだね、とても綺麗な女性になったね』

クライの幼い声が、レムの心を少しだけ落ち着かせてくれた。

「皆無事に再起動出来たんだね…よかった」

「クライはとても早く再起動が出来ただけだね、アングは頑固だから言うこと聞いてくれなくてね」

グランドが苦笑いをしながらそんなエピソードを話すと、アングが拗ねたようにランプを点滅させた。

『主、それは言うなと約束したではないか…まあいい、久しいなレム、おかげで世界は緑を取り戻せた、礼を言う』

相変わらずの堅苦しい言葉遣いに、レムは苦笑しつつも一つだけ気になることがあった。

「お二人とも、私の名前呼んでくれますね」

『主がそう命じたからだ』

とアングが言う。

『ふふっ、そうなんだよねー、主がレムって名前があるんだから、そう呼びなさいって』

とクライが言う。

そして最後にストロアが、

『そういうことだ』

と言ってしめた。

三体の答えがとても仲良く一致していたせいで、レムは思わず笑ってしまった。

先ほどまであんなに余裕のなかった自分が、今はこんなにも余裕で笑っていられると思うと、笑わずにはいられなかった。

「どうやら君は変わっていないようだね、安心したよ」

とても楽しそうに笑うレムを見て、思わずグラドがその口にした。きよとんとしレムはグラドを見上げ、どういふ事が尋ねた。

「君はあの頃に比べてとても成長した、とても美しい女性になったんだ、ただあの頃の心を忘れていない…そう、心がいつまでも君のままできてくれた事が嬉しかったんだ」

そう言っつて、グラドは優しく微笑んだ。

あの頃の彼だったなら、きつとこんな優しくて柔らかい微笑みなど出来なかっただろう。

そう思っつた時、レムの心に再びあの感覚が戻ってきた。

苦しくて、鼓動が早まるこの感覚に、レムは思わず顔を歪める。

様子がおかしい事に気付いたグラドは、レムに座るよう言っつが、一向に座ろうとしなかった。

困ったグラドをよそに、レムは我慢できなくなってその感覚と想いを口にした。

「私のこの胸の…心の痛みは、グラドさんの事を想っつているからだと思います、この感覚がどんな事を意味するのか、私にはわかりません…でも、これは幸せな苦しみなのですよね？私はこの痛みが只

の苦痛だとは思っていません、だって…この痛みは貴方に対する想いの反動だと思うから」

その言葉に、グラドはレムをぎゅっと抱き締めた。自分は間違っていた。

彼女はちゃんと大人の女性になっていたのだ。

あの優しくかった笑顔の奥にも、成長した彼女の姿があったのだ。

幼い頃の『レム』ではなく、美しく、気高い女性になった『レム』は、自分に好意を抱いていたようだ。

だがそれを彼女は知らない。

人間とは隔離された森に暮らしていた彼女には、その感覚を教える者などいなかったからだ。

彼女が今、この感覚を感じられるのは、恐らくあの時の旅をしたからだろう。

でなければきつと死ぬまで誰とも恋をしなかっただろう。

ああ、自分は何て罪な存在なのだろう。

こんなにも無垢な娘が、こんなに汚れた自分を好きになってしまうなんて。

今この手で彼女を突き放せば、どれだけ楽だろう。

だが苦しみを味わうのは彼女一人になってしまう。

ならば…と、グラドはレムを一度離すと、彼女の両肩に手を置いてゆっくり口を開いた。

「単刀直入に言おう…君のその苦しみは、『恋』というものなんだ、誰かが誰かを…そう、とても大切に思うんだ、大好きで、愛しくて、その想いを口にしてしまいたいくらい、愛しているんだよ？君はその大切な感情を、私のような罪人に向けてくれた…それはとても嬉しくて、光栄に思う、けど君はそれでもいいのかい？私は罪人だ、君を光から闇へ落としてしまうかもしれない、それでも君は私を愛するかい？」

グラドはレムに優しく語りかけた。

壊れてしまいそうなレムの体にさえも、本来なら触れてはいけな
いと戒めていた自分だが、彼女が自分をそれでも求めるとい
うならば、彼女の足元を支える影になろうと思った。

レムは初めての事に戸惑っているようだったが、自分の中で
答えを見いだせたのか、すっきりした表情で再びグラドに話
した。

「私はこの感情が分からない、名前を知っていても、ど
んな事なのかを聞いても分からない、それでも分かる事は
一つだけある…それは、貴方を想わずにはいられない、もし、
世界が私の願いを許して下さるのなら…私は貴方の光に
なりたいたい」

その言葉は彼女が生まれて初めて告げた、告白だった。

目を見開いたグラドを、レムはただ女神のような微笑みで見
つめていた。

許されるなら、この想いを受け止めて愛いっくしてみたい。

ああ、これを世界が与えた機会だというのなら、私はすべて
を賭けて彼女を愛そう。

世界に刻まれた英雄の名前。

それは世界の真ん中に建てられた巨大な石碑にあった。

それは時と共に廃れ、消えていく。

それでも二人は心を振り返る。

世界のあるべき姿を、人間の進む未来を、人を愛する想いを。

風化して崩れかけた巨大な石碑のそばには、小さな小さな花と、
女神が笑っていたという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2459t/>

the natural world

2011年5月14日13時30分発行